



ICOM 京都大会からみた
あたらしいミュージアムのかたちとは？

ICOM 京都大会 2019 報告会・ワークショップ報告書

京都歴史文化施設クラスター実行委員会
ICOM 京都大会 2019 組織委員会
ICOM 日本委員会

ICOM 京都大会 2019 報告会・ワークショップ

ICOM 京都大会からみた

あたらしいミュージアムのかたちとは？

日 時

2020 年 1 月 13 日（月・祝）

会 場

京都文化博物館（京都市中京区三条高倉）

参 加

無料・事前申込制・先着順

主 催

京都歴史文化施設クラスター実行委員会

ICOM 京都大会 2019 組織委員会

ICOM 日本委員会

凡例

- ・本書は「ICOM 京都大会 2019 報告会兼ワークショップ ICOM 京都大会からみた あたらしいミュージアムのかたちとは？」の報告書である。
- ・本報告会兼ワークショップの企画・運営は、京都文化博物館（新井美那、植田憲司、植田彩芳子、齊藤千絵、西山剛、村野正景）、ICOM 京都大会準備室（川田萌子、関谷泰弘、邱君妮、西記代子、松山沙樹）、村田麻里子、佐藤優香、高尾戸美が主に担当した。
- ・報告書の内容は、当日の発表内容を音声起こした原稿を編集し、各発表者の校閲を経たものである。各発表は趣旨の変更を伴わない程度の修正を加えた。
- ・本書の編集は、京都文化博物館と ICOM 京都大会準備室がおこなった。
- ・「4. ワークショップ」の編集は佐藤優香と高尾戸美の協力をいただいた。
- ・本事業ならびに本書の刊行は、「平成 31 年度文化庁地域の博物館を中核としたクラスター形成事業」の支援を受けた。

目次

1. 本書作成の趣旨

3

2. 京都大会 2019 概要の紹介 兼 基調講演概要

4

3. 専門家によるポイント解説

9

(1) 持続可能な未来の共創

9

(2) ICOM 博物館定義の再考

14

(3) 被災時の博物館

21

(4) 世界のアジア美術とミュージアム

23

(5) デコロナイゼーションと返還

27

(6) 博物館と地域発展

30

(7) マンガ展の可能性と不可能性

32

(8) 質疑応答

36

4. ワークショップ

40

(1) ワークショップのコンセプトおよび概要

40

(2) 実録ワークショップ

42

ー 1 イントロダクション

42

ー 2 問いかけ

43

①「ICOM2019 を振り返って：3つの問いかけ」

②「博物館定義はだれのものか」

ー 3 第1セッション「博物館の新しい定義案」

47

①グループワーク

②グループ発表

ー 4 第2セッション「みんなで考えたいこと、私がもっと考えたいこと」

54

①グループ分け

②グループ発表

ー 5 第3セッション「自分と向き合う」

63

①キューブの作成

②キューブの共有

③まとめ

5. 付録

71

(1) 報告会配布資料「ICOM 京都大会主要プログラム概要（暫定版）」

71

(2) チラシ

78

(3) 集合写真

80

1. 本書作成の趣旨

2020 年 1 月 13 日に ICOM 京都大会報告会兼ワークショップを京都文化博物館にて開催しました。本書はこの催事の報告書です。この催事の趣旨は以下のとおりでした。

2019 年 9 月に開催された ICOM 京都大会では、どうすれば博物館が社会に貢献できるのか、よりよい未来のために博物館は何ができるか、世界の博物館職員や関係者が集まって議論しました。そのテーマは、持続可能性や防災・減災、あるいは博物館の新しい定義など多岐にわたりました。どれも大変興味深いテーマで、議論も白熱したようです。

しかし残念ながら、全てのセッションに参加できた人は少ないでしょう。もう一度議論の要点をおさらいしたいという人もいるでしょう。そこで、ICOM 京都大会 2019 の振り返りをおこない、さらに今後、日本のミュージアムにどのように還元できるのかを具体的に検討するワークショップを企画しました。ICOM に参加しなかった / できなかった学芸員たち / 実務者たちにとっても、ICOM の成果がどう具体的に日々のリアルな業務に役立つのかを見出す機会となれば幸いです。ぜひとも、このワークショップ参加者の皆様と共に、ICOM で提示された様々な「素材」をどう「調理」したら、真に我々の「糧」となるかを考えたいと思います。

この趣旨に則りつつ、当日は第 1 部 ICOM 京都大会レポートとして、同大会の全体の概要や主要な論点を紹介する報告会をおこない、第 2 部ワークショップでは、第 1 部の報告を踏まえて、参加者がお互いに議論を深められるようにいたしました。プログラム概要は以下の通りです。

第 1 部：ICOM 京都大会レポート（会場：京都文化博物館 3 階フィルムシアター）

趣旨説明

京都大会 2019 概要の紹介

専門家によるポイント解説

「持続可能な未来の共創」「ICOM 博物館定義の再考」「被災時の博物館」「世界のアジア美術とミュージアム」「デコロナイゼーションと返還」「博物館と地域発展」「マンガ展の可能性と不可能性」

第 2 部：ワークショップ「あたらしいミュージアムのかたち」（会場：京都文化博物館 6 階和室）

本催事は発表登壇者・コメンテーター等だけでも 12 名となり、参加者は 96 名でした。当日は、学芸員や実務者たちのもつ意見や疑問が率直に出されて、またそれについて豊かな対話がなされていて、とても有意義な催事となったと感じています。そこで、この催事の概要を記録するため、本報告書を作成いたしました。ICOM 京都大会で提示された論点は多岐に及び、まだまだ議論はつきないでしょう。今後、関連する議論の参考資料ともなれば幸いです。

2. 京都大会 2019 概要の紹介 兼 基調講演概要

関谷泰弘 (ICOM 京都大会準備室)

私からは、ICOM 京都大会に参加されていない方もたくさんいると思いますので、全体の概要を数字や結果と合わせて説明したいと思います。

まず、ICOM とは、皆さんご存じだと思いますが、1946 年に発足した組織で、パリに本部があります。ICOM は、博物館の専門家が 4 万人以上も参加している組織で、この中に国際委員会、国別や地域ごとに委員会があり、それぞれ独自に運営しています。文化財の保全やミュージアム倫理規定、研修等、ネットワークを生かした博物館界全体の向上をミッションとしている組織です。この ICOM が 3 年に 1 度開催する大会が今回、京都で開催されました。次回はチェコのプラハで行われます。

ICOM 京都大会は、2019 年の 9 月 1 ～ 7 日の 1 週間に渡り開催されました。国立京都国際会館をメイン会場として、稲盛記念会館にもご協力いただいて、2 カ所の会場で行われました。テーマは『文化をつなぐミュージアムー伝統を未来へー』。ここには、博物館がどのように結節点として社会をつなぐ役割を果たしていけるか、という意味が込められていました。そのため、基調講演を含め、多くのセッションは、ミュージアムの役割を踏まえたテーマ設定になっています。1 日が会議で、2 日から一般参加の方の初日でした。午前中は開館式、基調講演やプレナリーセッションが行われました。午後は 30 の国際委員会のセッションがありました。同様に、3 日、4 日も同じように午前中に基調講演、プレナリー・セッションがあり、午後に各国際委員会の発表がありました。5 日はオフサイト・ミーティングとして、国際委員会がさまざまな地域でミーティング等を行

い、6 日にはエクスカージョンがあり、7 日が閉会式でした。参加した方々は 1 週間を通してさまざまな交流があったかと思います。

基調講演は、隈研吾さん、セバスチャン・サルガドさん、蔡國強さんの 3 人をお願いしました。隈研吾さんは、『森の時代』というテーマで、環境との調和やつながりがミュージアムにも必要で、人々を受け入れるプラットフォームのような、物を展示するだけではなくて社会をつなぐような、そういうミュージアムであってほしいと述べられていました。

セバスチャン・サルガドさんは写真家ですが、今、アマゾンの森林保護に力を入れています。講演で特に強調されていたのは、アマゾンの森林破壊を防ぐには人々に関心を持ってもらうことが必要で、彼自身、映画を撮ったり、写真をアーカイブ化したり、展示会をしたりと、アマゾンやそこに住む先住民族の人たちに皆さんの関心を持ってもらう活動を積極的に行っています。ミュージアムにはぜひ、そういう展示等を通して関心を持ってもらうだけではなくて、保全につながる行動を起こしてほしいとおっしゃっていました。

蔡國強さんは『私の美術館春秋』というテーマで、美術館との関わりについて話をされました。特に話されていたのは、自分の、コンテンポラリーアートのアーティストですので、そのアーティストがミュージアムで受けたインスピレーションを元にいろいろ作品を展示しているという話で、アーティストにとってもミュージアムというのは非常に重要だという話と、あとは福島で展示を行った経験を通して、地域コミュニティとの接点の場としてミュージアムが大事という話をされ

ました。

プレナリー・セッションは、2 日が持続可能な未来の共創、サステナビリティの話。3 日が博物館定義、4 日が被災時の博物館、世界のアジア美術と博物館という、4 つのテーマで行われました。これに合わせ、ICOM 本部主催でパネルディスカッションがデコロナイゼーションと返還、マンガ展の可能性と不可能性、博物館と地域発展という 3 つのテーマで行われています。詳細はこの後、他の登壇者から話があります。

ここからは具体的な成果の話です。ICOM 京都大会に参加された方には混雑でご迷惑をお掛けしましたが、4590 人という過去最高の参加者を集めることができました。3500 人程度のミラノ大会と比べても大幅に増えています。日本からは、1866 人参加者がいました。120 カ国からの参加でしたが、ヨーロッパ、アジア、北米からもかなりの方に来ていただきました。ICOM が普通の国際会議と違うのは、国際委員会という形で 30 の会議が同時に開催されるため、スピーカーが多いことです。今回は 1500 人弱が登壇したので、来場者の 3 分の 1 くらいはスピーカーでもあったということになります。セッションも 230 開かれておりました。ソーシャルイベント、国際委員会のオフサイトが 31、エクスカージョンが 49。大会の後のツアーとしても 4 つ。あと、京都市、京都府のご協力の下、150 以上のさまざまな関連イベントが期間中、清水寺や、京都文化博物館などで開催されました。他にも、無料開館、無料拝観等のご協力をいただき、参加者はかなり喜んでいただいていると思います。

展示会とは、スポンサー企業、ミュージアム

などがブースの展示で事業紹介するものですが、147 ブース、1303 人に展示出展者として参加いただきました。また、今回は協賛企業が非常に多く、145 団体にご協力いただきました。特にプラチナという 1000 万円の協賛が 5 社も集まり、非常にありがたかったところです。ボランティアはのべで 849 人、実数でも 338 人の方に参加いただきました。参加された方はかなり協力的で、ボランティアに対する評価も非常に高かったので、会期中、非常に助かりました。

大会の成果としては、決議として 5 つ、可決されました。アジア地域の ICOM コミュニティーの融合とは、ヨーロッパ中心だった ICOM に、よりアジア的な視点を入れていこうというものです。他にも、『Museums as Cultural Hubs』という大会テーマの理念の徹底や、サステナビリティのミュージアムでの推進等が決議されました。国際委員会も、博物館倫理問題国際委員会と博物館防災国際委員会という 2 つが今回、新たに加わっています。満足度としては、全体では満足度 90 パーセントとなりました。参加された方は小さな不満は多くあったかもしれませんが、全体としてはいい会になったと思っています。

3. 専門家によるポイント解説

(1) 持続可能な未来の共創

林 浩二 千葉県立中央博物館

今大会最初のプレナリー・セッションは『博物館による持続可能な未来の共創』というタイトルの下に行われました。会議の実質的な初日ですね。今回の ICOM 京都大会は、今の関谷さんのお話にもありましたが、実は持続可能性ということが非常に強調された大会だったと思います。まず、プレナリー・セッション、こういうのは大事な順番に出てくるものです。その 1 番手が『持続可能な未来の共創』でした。それから、今も最後にお話をされましたが、大会決議は、その大会を特徴付けるもので、その 1 番目および 5 番目に持続可能性のことがとりあげられています。これまでの ICOM 大会の歴史の中で、持続可能性について最も多く言及された大会というふうに言っていると思います。

(スライド 3。以下、S 3) セッションに登場するのは、モデレーター、オープニング・スピーチとして毛利館長、それから 4 人のスピーカーとコメンテーターです。(S 4) こちらがモデレーターであり、ワーキンググループの委員長をされているノルウェーの Morien さんです。(S 5) セッションのオープニング・スピーチとして日本未来館の毛利館長が話をされました。(S 6・7) 毛利さんは、Aksoy 会長の紹介を受けて登壇し、既にいろいろところで話をされている、「つながり」をキーワードに持続可能な社会づくりに貢献していくという発表をしました。

(S 8) ここから発表者です。最初はアメリカから Sarah さんという方で、(S 9) ニューヨークのアメリカ自然史博物館が刊行している Curator という雑誌に、2017 年に、持続可能性のことを

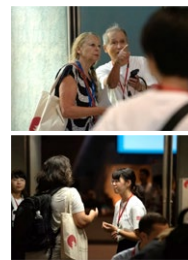
発表されています。(S10) 地球温暖化防止のパリ協定からアメリカ合衆国政府が抜けようとしているのですが、われわれはまだ、パリ協定に入っているよということを主張する、We are still in という組織でも活動されていました。(S11) 香港からは、地球温暖化のことに特化した世界で最初の博物館の発表で、(S12) 学生と市民とを巻き込んでいろんな活動をしているという話をされました。(S14) 3 番目は Bonita さん。南アフリカ、ケープタウンのディストリクト・シックスという博物館からでした。ここはアパルトヘイトの時代、約 40 年前、に住んでいた 6 万人ぐらいが強制的に 25km ほど離れた環境のよくない場所に移住させられて、住居はすべて壊された地域です。その後、開発はうまくいかずに、またそこに戻って暮らしてもらおうということになって、その文化的な中心とともにコミュニティセンターとしてこの博物館が機能している、(S15) こうやって昔の文化の体験とか、いろいろなプログラムをやっているという話でした。(S16) 4 番目、Yacy さんという方は、スペイン語の発表でした。その場では同時通訳で聞いていたのですが、ビデオを見直しても分からないというので大変でしたが、スライドのタイトルぐらいは分かり、(S17) 国連持続可能な開発目標と博物館を考えるにあたって、まず環境・経済・社会という 3 つの側面があり、その統合されたところに持続可能性が見えてきます。(S18) 次にこのような関係性の変化に、博物館や文化施設が貢献できるかについて、教育、コミュニティとの統合、調査研究、内部構造の変化を提案しました。(S19) 討論者の Henry McGhie さんは、発表

協賛



ボランティア

849 延べ
338 実数



大会成果



・アジア地域のICOMコミュニティへの融合
・Museums as Cultural Hubs」の理念の徹底 等



ICOM国際委員会 一覧

	略称	日本語訳
1	AVICOM	オーディオビジュアル及び映像・音響新技術国際委員会
2	CAAMOC	都市博物館のコレクション・活動国際委員会
3	CECA	教育・文化活動国際委員会
4	CIDOC	ドキュメンテーション国際委員会
5	CMACIM	楽器の博物館・コレクション国際委員会
6	CMUXET	科学技術の博物館・コレクション国際委員会
7	CPREG	エジプト学国際委員会
8	COMCOL	コレクティング国際委員会
9	COSTUME	衣装の博物館・コレクション国際委員会
10	DEMHIST	歴史的建築物の博物館国際委員会
11	GLASS	ガラスの博物館・コレクション国際委員会
12	ICAMT	建築・博物館技術国際委員会
13	ICDAD	装飾美術、デザインの博物館・コレクション国際委員会
14	ICEE	展示・交流国際委員会
15	ICFA	美術の博物館・コレクション国際委員会
16	ICIM	文学の博物館国際委員会

ICOM国際委員会 一覧

	略称	日本語訳
17	ICMAH	考古学・歴史の博物館・コレクション国際委員会
18	ICME	民族学の博物館・コレクション国際委員会
19	ICMENAO	公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会
20	ICMS	博物館セキュリティ国際委員会
21	ICOFOM	博物館学国際委員会
22	ICOM-CC	保存国際委員会
23	ICOMAM	武器・軍事史博物館国際委員会
24	ICOMGN	災害博物館国際委員会
25	ICR	地方博物館国際委員会
26	ICTOP	人材育成国際委員会
27	INTERCOM	マネジメント国際委員会
28	MPR	マーケティング・交流国際委員会
29	NATHIST	自然史の博物館・コレクション国際委員会
30	UMAC	大学博物館・コレクション国際委員会
31	ICETHICS	博物館倫理国際委員会 NEW !
32	DRMAC	博物館防災国際委員会 NEW !

全体満足度

90%



See you in Prague in 2022!

にコメントをするわけではなくて、全体にかかわる独自の発表をしていました。(S20) 博物館はどのようにSDGsを支援、サポートできるという話でした。(S21) そのこたえとして、スライドのような項目が挙がっています。(S22) ざっと訳してみました。(S23) この本は、Henryさんが作っていて94ページ立て、ウェブで公開されています。有用な本で、多分、政策決定者・意思決定者への説明に使えると思います。この冊子を材料に勉強会とか、あるいは翻訳して日本語にすることも考えています。参加・協力される方、集まりませんか？ (S24) 博物館と持

続可能性について、わたし自身は最近、このリストのようなことを発表していますので併せてご覧ください。ありがとうございました。

(注：このセッションの動画(約102分)はYouTubeで公開されています。本稿スライドの大部分はその動画から画面を取りこんだものです。)

https://www.youtube.com/watch?v=De09l9Gp3vI&list=PLY142wUw8BUras_7fdGjndn_vW7nIEi5XW&index=4&t=327s



5



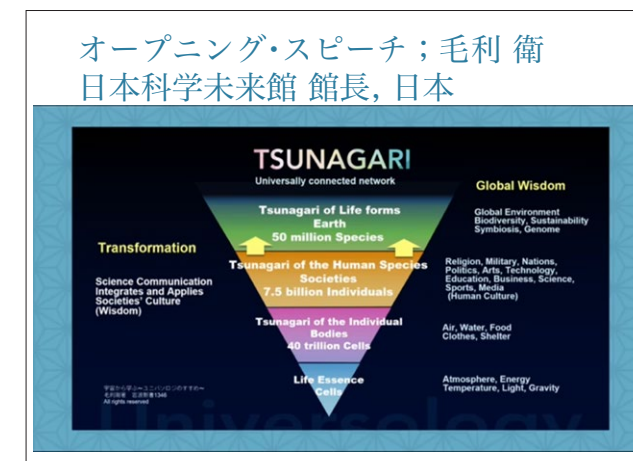
6



1



2



7



8



3



4



9



10

2. Cecilia Lam
Chinese University of Hong Kong
Jockey Club Museum of Climate Change 館長, 香港

11

2. Cecilia Lam
Chinese University of Hong Kong
Jockey Club Museum of Climate Change 館長

12

討論者；Henry McGhie
Curating Tomorrow, 英国

19

討論者；Henry McGhie
Curating Tomorrow, 英国

博物館はどのようにSDGsを支援できるか

20

3. Bonita Bennett
District Six Museum 館長, 南アフリカ

13

3. Bonita Bennett
District Six Museum 館長, 南アフリカ

14

How can museums support SDGs

1. Protect and safeguard cultural and natural heritage, both within museums and more generally
2. Support and provide learning opportunities in support of the SDGs
3. Enable cultural participation for all
4. Support sustainable tourism
5. Enable research in support of the SDGs
6. Direct internal leadership, management and operations to support the SDGs
7. Direct external leadership, collaboration and partnerships towards the SDGs

Presentation as discussant by Henry McGhie, UK

博物館はどのようにSDGsを支援できるか

1. 博物館の内外を問わず、文化遺産・自然遺産を保護する
2. SDGsを支援する学習機会を提供する
3. 万人に文化的参加を可能にする
4. サステナブル・ツーリズムを支援する
5. SDGsを支援する研究を可能にする
6. 館内のリーダーシップ、マネジメント、オペレーションをSDGを支援する方向に向ける
7. 館外のリーダーシップ、コラボレーション、パートナーシップをSDGsに向ける

指名討論者 Henry McGhie の発表から

22

3. Bonita Bennett
District Six Museum 館長, 南アフリカ

15

4. Yacy-Ara Froner
Minas Gerais 連邦大学教授, ブラジル

16

McGhie, H.A. (2019). Museums and the Sustainable Development Goals: a how-to guide for museums, galleries, the cultural sector and their partners. Curating Tomorrow, UK.

Available at www.curatingtomorrow.co.uk

94ページの冊子
ウェブ公開

博物館の現場で有用か。意志決定者への説得にとっても有用に見える。この冊子の読書会・輪読会をぜひやりたい！翻訳しては？

(参考) 博物館と持続可能性について

林 浩二. 2019. 博物館と社会を考える (10) 京都で開催された国際博物館会議ICOM大会. 市民研通信(54): 9p. https://www.shiminkagaku.org/csjnewsletter_054/

林 浩二. 2018. 博物館と社会を考える (9) ツールとしての持続可能な開発目標 (SDGs). 市民研通信(44): 10p. <http://www.shiminkagaku.org/20200020180323/>

林 浩二. 2018. 「メヘレン宣言」と「東京プロトコル」をどう活かすか～科学館・科学博物館の社会的役割～. 全国科学博物館協議会 第25回研究発表大会 論文集. p.71-77 <http://jcsn.jp/wp-content/uploads/presentation/25case10.pdf>

林 浩二. 2017. 博物館と社会を考える (8) 第2回世界科学館サミットと東京プロトコル. 市民研通信(43): 12p. <http://www.shiminkagaku.org/20200020180106/>

林 浩二. 2017. 地域のESDと博物館・図書館・公民館の連携. 社会教育 (857) : 32-37 2017年11月号

林 浩二. 2017. 博物館と社会を考える (6) 科学館・科学博物館の社会的役割宣言. 市民研通信 (40) 7p. <http://www.shiminkagaku.org/20200020170410/>

林 浩二. 2016. 博物館と社会を考える (5) 博物館の国際的動向2016. 市民研通信 (37) 12p. <http://www.shiminkagaku.org/30301020161011/>

24

4. Yacy-Ara Froner
Minas Gerais 連邦大学教授, ブラジル

17

4. Yacy-Ara Froner
Minas Gerais 連邦大学教授, ブラジル

博物館・文化施設・記念施設は、この関係性の変化に貢献できるか？

18

3. 専門家によるポイント解説

(2) ICOM 博物館定義の再考

五月女賢司 吹田市立博物館

私は ICOM 地方博物館国際委員会の理事をしていますが、本職は吹田市立博物館の学芸員です。私からは、9 月 3 日に開催された博物館定義の改定についてのプレナリー・セッションや改定議論そのものの話をしたいと思います。簡潔に申し上げますと、京都大会においては定義改定が目標とされていたのですが、9 月 7 日の臨時総会では結論が出ず、採択は延期となりました。京都大会で一番注目されていた議題が、この定義の改定だったと言っても過言ではありませんが、それだけに 9 月 3 日のプレナリー・セッションを含め、採択に賛成、反対、慎重、それぞれの立場からの議論がかなり紛糾しました。定義の中身はお手元の資料をご覧ください。現行の定義と新定義案があります。また、レジュメの中で、議論の内容が簡潔にまとめられています。あと、ICOM 博物館定義関連年表は、博物館の定義が ICOM の創設以降の歴史の中でどのように変わってきたのか、特に国連の決議や勧告などとの相互関係の中でどう変わってきたのかを知るための資料です。これは、もともと私が自分の研究材料にするために作ったものを、皆さんとも共有しようと思い、配付するものです。定義の内容について簡単に申し上げますと、日本の博物館法でもいえることですが、現行の博物館定義というのは、資料を収集・保存し、それらを調査・研究し、普及・展示する機関であるといった博物館の機能面におおむね限定した内容になっています。それに対して新しい定義案は、博物館が社会に対してどのような役割を果たすのか、国際的な課題に対してどうアプローチしていくのかといったところを強調しており、それもそ

うした役割についての記述がかなりボリューム感のあるものになっています。とりあえず、ここまで概要をお伝えしました。ここから先は、スライドをご覧くださいながらプレナリー・セッションの概略や、定義改定に関連してプレナリー・セッションや私の周辺で聞こえた意見などをお話いたします。

2 枚目のスライドの内容はプレナリー・セッションの概要、3 枚目はプレナリー・セッションの登壇者で、太枠の 5 人は 2017 年 1 月に設置された特別委員会「MDPP（博物館の定義・展望・可能性）委員会）」のメンバーです。4 枚目は MDPP の全メンバーで、下線があるのはプレナリー・セッションの登壇者です。プレナリー・セッションでは、Jette Sandahl・IDPP 委員長をはじめ 7 人の登壇者が博物館の社会的、歴史的背景や様々な事例を紹介し、新定義案を採択することの必要性を訴えました。最後は、採択延期支持者の Bruno Brulon Soares・博物館学国際委員会（ICOFOM）委員長と、即時採択支持者の Lonnie G. Bunch, III・ICOM US 共同委員長（Smithsonian Institution）にそれぞれ意見を表明してもらうという、国際会議らしい民主的な側面も垣間見ることができました。

8 枚目では博物館定義改定を巡る最近の流れを時系列で記載しています。2017 年 1 月に MDPP が誕生してから、9 月 3 日のプレナリー・セッションと 9 月 7 日の 4 時間もかけた臨時総会で採択延期が決まるまでの流れです。9 枚目は博物館定義の概要です。最短で 2020 年 6 月のパリでの年次総会で改めて採決されるということと、2022 年

のプラハ大会に持ち越しの可能性があることなどが書かれています。ただ、採択されることになる定義の内容は、現在示されている博物館定義案通りかどうかは分かりません。定義の内容について、詳細はお手元の資料をご覧くださいと思います。少し見ただけでも、新定義案は博物館の機能面だけではなくて役割面がボリューム感を持って語られているということがわかっていただけたと思います。

最後に 13 枚目のスライドです。プレナリー・セッションや私の周辺から聞こえてきた新定義案についての意見ですが、様々な考えがあることがわかります。採択延期支持者からは、「新定義案の発表日 7 月 25 日は京都大会の 6 週間前であり、各委員会で議論する時間がなく採決の延期を求める」「新定義案の文中に民主化とあるにも関わらず、改定の手続きが非民主的」「新定義案の文中から常設機関という言葉が外された」「観念的であり、ミッション、ヴィジョンである」など、即時採択支持者からは、「新定義案の内容は特段新しいものではなく、我々は普段から同様の問題意識を持って博物館活動をしている」などの声がありました。

日本の博物館界にとっても他人ごとではない定義案の改訂については、今後も注目していきたいと思います。

ICOM京都大会レポート
プレナリー・セッション
「ICOM博物館定義の再考」

吹田市立博物館 学芸員
ICOM地方博物館国際委員会 理事
五月女 賢司 (SAOTOME, Kenji)

於：京都文化博物館3階フィルムシアター
2020.1.13

1

プレナリー・セッション
「ICOM博物館定義の再考」 2019.9.3

- 京都大会で、最大の関心事の一つだったICOM博物館定義の改定に関するセッション。
- 特別委員会「MDPP（博物館の定義・展望・可能性）委員会」委員長のジェット・サンダーがモデレーターとなり、6人のスピーカーが登壇。
- 採択延期支持者を代表して、Bruno Brulon Soares (ICOFOM（博物館学国際委員会）委員長）が登壇。
- 即時採決支持者を代表して、Lonnie G. Bunch, III (ICOM US共同委員長＝Smithsonian Institution) が意見を述べた。

2



7

「博物館定義」改定を巡る、最近の流れ

- 2017年1月
 - ICOMが博物館定義改定のための特別委員会「MDPP（博物館の定義・展望・可能性）委員会」を設置し、各国国際委員会や国内委員会で行くつかの共通の議題をもとにラウンドテーブル（円卓会議）を行うよう呼びかけた。
- 2018年12月9日
 - 以上の結果を基に、特別委員会「MDPP（博物館の定義・展望・可能性）委員会」からICOM執行役員会へ提出された、現行の「博物館の定義」改定に関する提議「提言と報告」が、全会一致で承認。
- 2019年5月20日 べ切
 - 「ICOM博物館の定義」の見直しに関する意見募集（会員、非会員問わず）。69ヶ国から出された25言語に及び269の提言を、5つの定義にまとめた。
- 2019年7月21日・22日
 - 特別委員会「MDPP（博物館の定義・展望・可能性）委員会」での検討を経て、パリでの理事会で決定。
- 2019年7月25日
 - ICOMが新たな博物館の定義案を発表。
- 2019年8月19日・20日
 - 英字版2紙が反対の論調の記事を掲載。
- 2019年8月下旬
 - INTERCOM（マネジメント国際委員会）委員長名で、新定義案に対する公開反対表明書をスアイ・アクソイ会長宛に提出（この他にも複数の国際委員会、国内委員会が反対を表明（8国際委員会（30の内）、26国内委員会（15の内）から採決延期の申し出））。
- 2019年9月3日
 - プレナリー・セッション「ICOM博物館定義の再考」で、採択延期支持者、即時採決支持者の各1名が登壇。「議論が尽くされていない」「使用する単語が不適切」「緊急議論の中で採決を進行すれば、ICOMは分裂しかねない」、「我々はいつまで待たねばならないのか」、「（新しい定義の下で）世界をよりよくしたい」などの意見。
- 2019年9月7日
 - ICOM京都大会の臨時総会で70.41%の賛成票により、採決に含まれる博物館の定義の新たな案に関する採決を延期する一時的決定（当初予定した新定義案に賛成・反対の投票ではなく、延期が各々の投票に反映）。臨時総会では、採決の延期に賛成・反対の投票（スアイ・アクソイ会長「緊急議論は今後も続ける」。佐々木志保、京都大会組織委員会「採決をすれば、国内の博物館法の見直しにつながる」）。

8

THE MUSEUM DEFINITION – THE BACKBONE OF ICOM
PLENARY SESSION
プレナリー・セッション
登壇者（2019.9.3）
はMDPP委員長と委員

Jette Sandahl
MODERATOR

George Abungu
SPEAKER

Margaret Anderson
SPEAKER

Luran Bonilla-Merchav
SPEAKER

Shose Kessi
SPEAKER

Nirmal Kishnani
SPEAKER

Richard West
SPEAKER

#ICOMKyoto2019 #MuseumDefinition

3

特別委員会「MDPP（博物館の定義・展望・可能性）委員会」委員長・委員（は登壇者）

- Jette Sandahl 委員長（デンマーク出身、MDPP委員長、コペンハーゲン博物館元館長、欧州博物館フォーラム理事）
- W. Richard West Jr. 認識論、世界観、博物館の類型論の主題を主導（米国出身、アメリカンウェスト・オートリー博物館館長、ICOMアメリカ役員）
- Margaret Anderson 文化的民主主義と文化的関与の主題を主導（豪州出身、メルボルン旧財務省ビル博物館館長）
- Kenson Kwok 博物館のパートナーシップ、所有権、ガバナンスにおける新規トレンドの主題を主導（シンガポール出身、プラナカン博物館・アジア文明博物館創設者兼館長）
- George Abungu 地政学、移動、脱植民地主義の主題を主導（ケニア出身、Okello Abungu 世界遺産コンサルタントCEO、ケニア国立博物館元館長）
- David Fleming グローバル・トレンドの主題を主導（英国出身、リバプール・ホープ大学公共史学科教授）
- Luran Bonilla-Merchav 社会および博物館にとっての課題に関する円卓会議の主題を主導（コスタリカ出身、コスタリカ大学教授、ICOMコスタリカ委員長）
- Francois Mairesse 博物館の定義に関するICOM博物館学国際委員会における協議を橋渡し（ベルギー出身、ソルボンヌ・ヌーヴェルパリ第3大学教授、ICOFOM元委員長）
- Alberto Garlandini ICOM執行委員会から参加（イタリア出身、ICOM副会長）
- Afsin Altaylı ICOM事務局から参加（ICOM事務局、博物館・社会コーディネーター）

4

博物館定義の概要

- 京都大会の注目は、「博物館定義」の改定だったが、見送り。
- 最短で2020年6月のパリでの年次総会で改めて採決。2022年のプラハ大会に持ち越しの可能性も。
- キーワードは、「持続可能性Sustainability」「脱植民地化De-colonisation」「返還Repatriation」「民主化Democratising」「アクセスのしやすさAccessibility」「多様性Diversity」など。
- 1946年に制定されたICOM憲章で初めて策定。
- ICOM憲章は1951年にICOM規約に改称され、ミュージアムの定義については1961年、1974年、1989年、1995年、2001年、2007年の6回にわたって改定。
- 現在の定義は1974年（コペンハーゲン大会）の改定をベースとしており、京都大会で改定されれば45年ぶりの大幅改定となるはずだった（改定には、賛成票2/3以上が必要）。
- 博物館法などを持たない国の博物館はICOMによる定義を参照しており、また、日本でも博物館法改定につながる重要なテーマ。

9

第3条「用語の定義」第1項「博物館」（現行の定義・日本語）

- 博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する、公衆に開かれた非営利の常設機関である。

イコム規約（2017年6月改定）※博物館の定義については2007年改定が最後

10



5



6

Article 3. Definition of Terms, Section 1 – Museum
（現行の定義・英語）

- A museum is a non-profit, permanent institution in the service of society and its development, open to the public, which acquires, conserves, researches, communicates and exhibits the tangible and intangible heritage of humanity and its environment for the purposes of education, study and enjoyment.

ICOM Statutes (As amended and adopted on 9th June 2017)
※博物館の定義については2007年改定が最後

11

ICOM規約「博物館」定義案
（特別委員会「MDPP（博物館の定義・展望・可能性）委員会」の定義案・日本語）

- 博物館は、過去と未来についての批判的な対話のための、民主化を促し、包摂的で、様々な声に耳を傾ける空間である。博物館は、現在の紛争や課題を認識しそれらに対処しつつ、社会に託された人類が作った物や標本を保管し、未来の世代のために多様な記憶を保護するとともに、すべての人々に遺産に対する平等な権利と平等な利用を保証する。
- 博物館は営利を目的としない。博物館は開かれた公明正大な存在であり、人間の尊厳と社会正義、世界全体の平等と地球全体の幸福に寄与することを目的として、多様な共同体と手を携えて収集、保管、研究、解説、展示の活動、ならびに世界についての理解を高めるための活動を行うものである。

第67回全国博物館大会決議、公益財団法人日本博物館協会（2019.9.5）より

12

3. 専門家によるポイント解説

(3) 被災時の博物館

西山 剛

京都文化博物館

内山大介・筑波匡介

福島県立博物館

この会は当日のプレナリー・セッションやパ
ネルディスカッションに参加した方に登壇いた
だくということを目標にしてやってきましたが、「被
災時の博物館」は期日までに参加者を見つけるこ
とができませんでした。そのため、参加しており
ませんが私のほうから作成したドラフトに従って
内容を紹介させていただくという形にさせていた
だきたいと思います。また本日は福島県立博物館
から、お二人の学芸員をお招きしております。ま
さに被災時の博物館（あるいは文化財）と直面し
ながら日々の活動をされておられます。私の報告
の後、それぞれの観点から補足をしていただけれ
ばと思います。それでは内容に入ります。

まず挙げた議題は、ブラジル国立博物館の火
災についての報告でした。2018 年に発生した火
災は、通常運営中の電気系統の故障によって発
生しているということがこの会までに明らかにな
っており、災害発生時の対策や適切な管理体制の
必要性が確認されました。続いて、この災害か
らの復興は瓦礫の撤去と収蔵品の修復を3年計画
で進めるというマニフェストが提案されました。
実際の被害は収蔵品の45パーセントが焼失した
ということで、まずはその調査が復興への直近の
課題であるということが述べられました。

引き続いてプエルトリコの事例で、2017 年の
ハリケーンに際する美術館の対応について事例報
告がなされました。災害対策が計画されていたけ
れども、大規模な災害時には情報の入手手段等、
想定外のことも非常に多かったということです。
普段の準備の重要性が訴えられました。かつ、美
術館の再開後は無料のワークショップや仮設の収

蔵庫設置による他のミュージアムの待避所として
の役割を図ったということが報告されました。
これらの報告を受けて、次に話題に挙げたのは、
大規模災害の頻度が地球規模で増加傾向でもある
にもかかわらず、ミュージアムが地域や国の災害
対策システムに組み込まれていないということだ
でした。ミュージアムのレジリエンス、回復力向上
のために、ICOM などのネットワークを使ってト
レーニング、あるいは専門家向けのガイドライン
の策定、アプリやマッピングツールを活用した災
害対策の共有等、これに対策する上でのいくつか
の方法論が示されました。

最後に日本からの事例として、2015 年に国連
で決議された世界津波デーに関する報告がありま
した。これに伴う世界津波ミュージアム会議の存
在と意義が説明され、ICOM やユネスコと連携し
て行われる世界防災フォーラムの開催が告知され
ました。

以上の報告でお分かりのとおり、これら一連の
セッションは事例紹介的なものが中心でしたの
で、これがいかに日本と結び合うのかという視点
をちょっと補足していただきたく思いまして、福
島県立博物館の筑波さん・内山さんにご意見を頂
こうと思います。

はい。福島県立博物館の筑波です。ちょっとや
やこしいんですけども、私はこの福島県立博物
館は2年目で、それ以前は新潟県の長岡市にいま
した。新潟県中越地震の被災地にいました。阪神淡
路大震災が今週で25年になりますが、中越地震
から15年なんです。そしてこのセッションで話

プレナリー・セッションや周辺から聞こえてきた意見

- 新たな定義案の発表日7月25日は京都大会の6週間前であり、各委員会で議論する時間がなく採決の延期を求める。
- 民主化Democratisingとあるにも関わらず、改定の手続きが非民主的。もっと民主的に、時間をかけて議論すべき。
- 常設機関Permanent institutionという言葉が外された。
- 教育Educationという言葉が外された。
- 観念的であり、ミッション、ビジョンである。
- イデオロギー的Ideologicalであり、政治的である。
- 多声的Polyphonicなどという単語は、英語圏であまり使用しない。音楽学の専門用語であろう。
- どの国もが採用できる、簡潔で明確な定義にすべき。結果的に博物館のコミュニティから排除することになる。
- 欧米先進国の進歩主義者や途上国エリートの価値観であり、新植民地主義的neo-colonialism*な意識化での策定とすら思える。
- 新定義案の内容は特段新しいものではなく、我々は普段から同様の問題意識を持って博物館活動をしている。

*主従の関係が植民地時代と変わることなく、すなわち、先進国による経済・文化の支配的地位が維持さ
れたままの状態で、多国籍企業など圧制的優位な立場にある組織によるグローバルな経済・文化活動が
行われること。

参考文献

- 「ICOM博物館の定義」の見直しに関する意見募集について
- MDP「提言と報告」(JP)
- ICOM京都大会プログラム (JP)
- 第67回全国博物館大会決議、公益財団法人日本博物館協会 (2019.9.5)
- Development of the Museum Definition according to ICOM Statutes (1946-2007) - ICOM
- Museum Definition - ICOM
- Creating the new museum definition over 250 proposals to check out! - ICOM
- Workshop The Backbone of Museums Roundtables on a new museum definition - ICOM
- #ICOMkyoto2019 Rewind - Plenary Sessions - ICOM
- What exactly is a museum Icom comes to blows over new definition - The Art Newspaper 2019.8.19
- Are Art Institutions Becoming Too 'Ideological' The International Council of Museums Is Divided Over Politics in the Galleries 2019.8.20
- A RISKY CONTROVERSY OR A POTENTIAL CONVERGENCE - The Humanist Museum - Medium 2019.8.23
- 'New definition for museums will give them boldness to argue' - Mumbai News - Times of India 2019.10.6
- カレントアウェアネス・ポータル-国際博物館会議 (ICOM) 、規約に含まれる博物館の定義の新たな案を発表：2019年9月に京
都で開催される臨時総会で採決へ 2019.8.1
- カレントアウェアネス・ポータル-国際博物館会議 (ICOM) 、博物館の定義の新たな案の採決を延期 2019.9.9
- 美術手帖-日本初開催、ICOM (国際博物館会議) 京都大会で「Museum」の定義が変わる？ 2019.8.30
- 美術手帖-ミュージアムは「文化のハブ」になれるのか？ ICOMが問い直す「博物館」の定義 2019.9.3
- 美術手帖-ミュージアムは持続可能な社会にどう貢献すべきなのか？ ICOMでセッション開催 2019.9.3
- 美術手帖-ICOM (国際博物館会議) 京都大会が開幕、「Museum」の新たな定義のゆくえは 2019.9.7
- 朝日新聞-京都 ICOM京都大会 博物館の定義めぐり議論 2019.9.4
- 朝日新聞-ICOM京都大会 閉会 2019.9.9
- 朝日新聞-協調と対話 これからも ICOM京都大会 2019.9.13



し合われていたのは資料レスキューのことかと思いますが、新潟の場合は中越地震以降も、今までにいくつかの地震や風水害が立て続けに起こっていて、一度、中越地震のときにできたネットワークというのが比較的、持続的に活動してきたわけです。

また、地元の新潟大学が中心となって、毎年、シンポジウムといいますか勉強会を開催してくださることによって関係者が集うことができています。結果として顔の見える関係が15年間、続いてきています。

新潟県の場合はまた被災からの復興計画ですとか、これから書き上げられます文化財保存活用大綱にも文化財レスキューの項目がしっかりと書かれていて、博物館の学芸員が仕事として資料・文化財レスキューに関われるような体制ができているというふうに聞いております。

同じく福島県立博物館の内山と申します。よろしく願いいたします。私もこのセッションには参加していないので、セッションの概要を受けて、普段の仕事に引きつけて少し述べさせていただきたいと思います。今回のセッションは博物館による災害時の対応の前提となる、平常時の在り方が問われたのだと思います。福島県ではご存知のとおり、東日本大震災の地震や津波の後に原発事故が起こって、「警戒区域」という人が立ち入れない地域が生まれました。私たちにとって、そこに残り残された文化財の救出、保全が大きな課題でありました。この活動は我々福島県内の学芸員や文化財関係者に加えて、国の被災文化財等救援委



員会の関係者、あるいは日本博物館協会の呼び掛けに応じていただいた全国の多くの文化財関係者の方々によって行われました。県内では福島県被災文化財等救援本部という組織を作り、県の文化財課を中心に県立博物館や美術館、県内の大学、そして各自治体に参加する形で、組織的な活動を行うことができました。

あの震災からもう9年になるわけですが、この組織はある意味では形骸化しつつも現在まで残されています。こうした経験やネットワークは、昨年の台風19号での被災時に大きな意味を持ちました。台風19号の被害では、県内では3カ所で博物館等の被害があったわけですが、県に被災自治体から救援依頼を上げていただき、それを受ける形で県の文化財課から県内の教育委員会や博物館などへ救援要請を行いました。こうした手続きを経て、それぞれの関係者は公務で文化財レスキューに従事することができました。ある意味では東日本大震災でできたネットワークを応用する形で、台風被害による文化財保全活動が進められています。

今、県の救援本部という組織自体は震災から9年を経て形骸化していたと申し上げましたが、実は非常時に必要なネットワークを平常時に維持するのは非常に難しいことです。非常時においては活動の目的が明確ですから、そうしたネットワークは有効に機能するわけです。しかし、災害が起こった時に必要な体制やネットワークを平常時においてどのように構築し、また維持していくかということは、今後の大きな課題になるのではないかと考えています。以上です。

3. 専門家によるポイント解説

(4) 世界のアジア美術とミュージアム

マリサ・リンネ 京都国立博物館

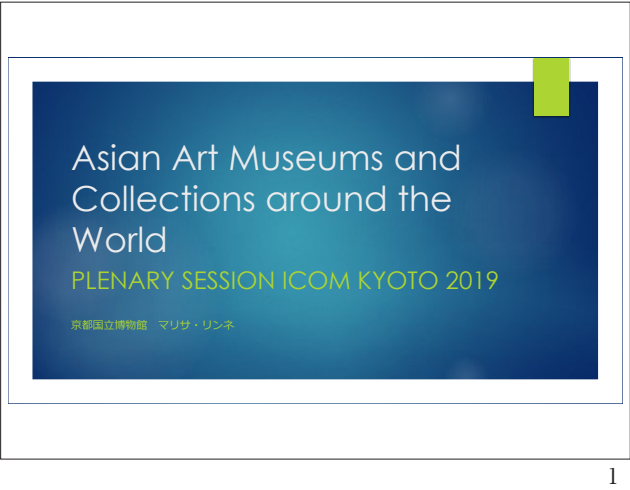
本日は、『世界のアジア美術館とミュージアム』のプレナリー・セッションについて、発表させていただきます。西洋の美術館では、例えばアジアからの美術品が収蔵されても、その歴史背景や扱い方などについて必ずしも理解があるとは限りません。ヨーロッパ中心で始まったICOMの中にアジアの国際委員会などはないので、このICOM京都大会を契機に、アジア美術の特徴など様々な課題を考えるプレナリー・セッションが企画されました。美術品の扱いなどの問題とともに、アジア以外の博物館・美術館に勤務するアジア美術の専門学芸員間の交流をどう推進するのか、様々な取り組みがこのセッションに紹介されました。司会がハーバード大学アジア美術教授のユキオ・リピット Yukio Lippit で、非常に上手に様々な問題をまとめてくださいました。最初の発表者はICFAという美術の国際委員会の委員長であるクリストフ・リンド Christoph Lind でした。この方は実は中国語ペラペラで中国美術も詳しいですが、主に西洋美術を収蔵する美術館の館長をされています。美術、そして美術の世界の中のアジアの重要性についてさまざまなことを語ってくださいました。千葉市立美術館の館長の河合正朝が日本の設（しつらい・しつらえ）とか座敷飾りのような歴史上の日本美術の特徴や飾りについて説明されました。その後は、オーストラリアのシドニー市にある工芸科学博物館（MAAS、別称：パワーハウスミュージアム）に勤める、韓国出身の工芸担当学芸員キム・ミンジュン Min-Jung Kim からの発表がありました。キムさんはKorea Foundation 韓国国際交流財団の、世界

の韓国美術の学芸交流事業について紹介してくださいました。その後、東洋人として西洋の博物館の中で学芸員をするという経験について語りました。アジアに対する西洋的な偏見の中で、どうやってアジアを見せるのかについて雄弁にいろいろ話してくださいました。次はアン・ニシムラ・モース Anne Nishimura Morse っていうボストン美術館の日本美術の学芸員です。モースさんは同時にCULCON（日米文化教育交流会議）の委員として、そのワーキング・コミティーの一つであるArts Dialogue Committee（美術対話委員会）の米国側委員長も務めます。日本側委員長の九州国立博物館館長の島谷弘幸と一緒に、その委員会を通じて、世界中の日本美術のさまざまな課題をどう解決するか、世界に活躍する日本美術学芸員をどうやって連携させて、仕事を推進できるかという活動を紹介してくださいました。

その後、パネルディスカッションがありましたが、私自身にとっては非常に今回よかったと思ったのは、一つはオーストラリアのキムさんの発表でした。西洋の美術館におけるアジア美術コレクションは、やはり西洋人の見方でみた東洋美術という見方が強いという課題を指摘していました。オーストラリアの美術館にある東洋美術の収蔵品は主に19世紀から20世紀にかけて西洋人によって収集され、東洋にある、つまり日本とか韓国の国立博物館にある総合的なコレクションとは中身がかなり違っています。西洋人がもつ東洋へのステレオタイプの下に収集されているもの、つまり万博などの機会に収集を求められたちょっと偏った作品が多いのです。そのようなコレクションを

東洋人の学芸員としてどのように見せればいいのかについて話してくれました。一つの対策として、逆に東洋から見たステレオタイプの西洋への偏見、例えば「ロリコン」や「カワイイ」などというハイブリッド展示を通じて「アジアの見方」について問いを提供されました。

それからもう一つ面白かったのが、ボストン美術館のモースさんの発表で、レベルの高い日本美術専門家を養成するための近年のさまざまな方策を説明してくださいました。その一つは、JAWS(Japan Art History Workshops) という、日本美術専門の大学院生交流プログラムと、もう一つが、Next Generation Curatorial Positions、つまり次世代の学芸員を養成するための助成金による若手向けのポストです。その他、東京国立博物館と国立文化財機構が企画する北米・欧州ミュージアム日本専門家連携・交流事業という毎年の日本美術学芸交流プログラム、そしてINJA (International Network for Japanese Art) 日本美術国際日本美術ネットワークという新しい仕組みについても説明してくださいました。以上、ご清聴ありがとうございました。



3. 専門家によるポイント解説

(5) デコロナイゼーションと返還

古沢ゆりあ 滋賀県立近代美術館



7



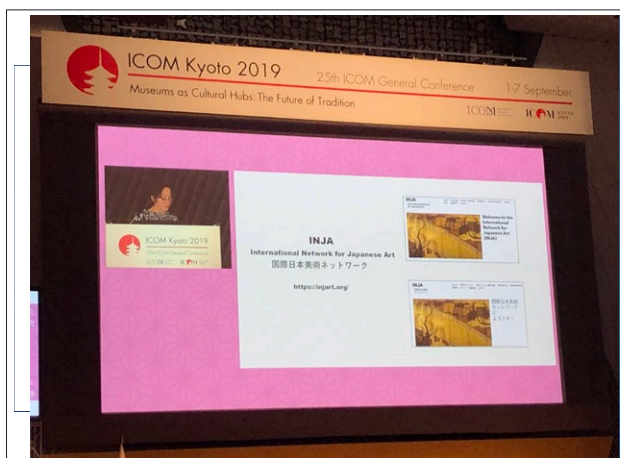
8



9



10



11

パネルディスカッション「デコロナイゼーションと返還」について報告します。

タイトルの日本語訳からは内容がわかりにくいですが、私たちが普通言う「脱植民地化と文化財返還問題」のことです。この問題は画一的方法では解決できないと留保した上で、支配した側とされた側双方の国や民族の人が議論しました。

セッションは前半と後半の二部で、前半の登壇者はスライドの通りです。

まず、植民地を経て成立した国家における先住民をめぐる展示に関して、オーストラリア、ブラジル、カナダの登壇者が報告しました。例えば、カナダのリヴェイ氏は、先住民のキュレーターによる取り組みなどを紹介しました。インドのデワン氏は、イギリスの植民地インドの歴史について話し、モノをただ返せばいいのではなく、植民地主義を背景としてきた教育を変えることで脱植民地化が実現できると言いました。イギリスのパイ氏は、イギリスの植民地や奴隷交易の歴史について、植民地主義に起因する差別意識を変えるための博物館の取り組みについて紹介しました。アメリカのエランド氏は、アメリカでは先住民やアフリカ系アメリカ人の問題があることを話しました。

後半の登壇者はスライドの通りです。

フランスのギエ氏は、かつて奴隷貿易の港があったナントの歴史博物館の奴隷貿易の展示について話しました。博物館は植民地の申し子といえる、とした上で、植民地から略奪され博物館にある物について、資料アーカイブでの裏付け、コンテクストへの置きなおしが重要と言います。フランスとアフリカの美術館との協力の事例について

も触れました。ドイツのライフェンシート氏は、植民地をもつ帝国としてのドイツの歴史について述べ、第二次世界大戦後、ホロコーストの問題が出てきた後、植民地支配の過去についても扱われるようになったと言いました。ナミビアのカプカ氏は、18世紀以降ナミビアから2万点もの文化財が流出したものの、1995年以降、返還されたものもあることを紹介し、ヨーロッパにある物がナミビアとの新たな対話を生み出す可能性、対等な協力関係のもとに返還が行われるべきであると述べました。

次に、質疑応答と議論を紹介します。

まず、植民地は終わっていると思うかという問いに、登壇者一同首を振りました。また、先住民や奴隷の話だけでなく、現在パレスチナなどおこっている略奪や抑圧はICOMではどのように扱うのか？という問いには、専門の委員会はないが、考えていきたいとのことでした。必ずしも植民地化したりされたりしていない地域にも同様の問題はあるため、テーマを、「脱植民地化と返還」ではなく、「自民族中心主義と返還」にしてはという提案や、博物館と脱植民地化の問題について、ICOMとして提言書を出してという要望もありました。

また、当事者の声として「アフリカは物を返還してほしいとずっと要求してきた。奪われたものが何なのかヨーロッパ人がわからないなら博物館の怠慢だ。」と厳しく糾弾するものもありました。全体として、パレスチナやアフリカなど抑圧されている立場からの発言があると会場から拍手が起こって応援しているのが印象的でした。

まとめます。今回は西洋やアフリカの話が中心に進められましたが、自民族中心主義の問題を含めて、世界各地ではまる極めて今日的な課題です。博物館定義のセッションでも触れられていましたが、博物館は中立的な存在ではなく、権力と結びついてきた歴史があることに自覚的になる必要があります。植民地主義の残した禍根は、奪わ

れた文化財が単に返還されるだけでは終わりません。支配者側に残る差別意識、被支配者側に植え付けられた負の心性を、教育を通して変えていくことで脱植民地化が達成できるといえます。モノを所蔵し、社会教育を行なう場である博物館のあり方が問われています。



質疑応答と議論

- 植民地化のプロセスは終わっていると思うか。→否
- 先住民や奴隷の話だけでなく、パレスチナなどでおこっている現代の略奪や抑圧はICOMではどのように扱うのか？
→専門の委員会はないが、考えていきたい。
- 必ずしも植民地化したりされたりしていない地域にも同様の問題はするため、テーマを、「脱植民地化と返還」ではなく、「自民族中心主義 (Ethnocentrism) と返還」にしては。
- 博物館と脱植民地化の問題について、ICOMとして提言書を出してください。
- アフリカは、文化財を奪われただけでなく言語や思考も植民地化されてしまった。アフリカの声を聞かずにアフリカの話をしないでほしい。
- セネガルから来た者としてショックだ。アフリカは60年代に独立し、物を返還してほしいとずっと要求してきた。地元の共同体は何が奪われたかわかっているが、ヨーロッパ人がそれがわからないなら博物館の怠慢だ。



まとめ

- 今回はヨーロッパとアフリカの話が中心に進められたが、自民族中心主義の問題を含めて、世界各地ではまる今日の課題である。
- 博物館は中立的な存在ではなく、権力と結びついてきた歴史があることに自覚的になる必要。
- 植民地主義の残した禍根は、奪われた文化財が単に返還されるだけでは終わらない。支配者側に残る差別意識、被支配者側に植え付けられた負の心性を、教育を通して変えていくことで脱植民地化が達成。
- モノを所蔵し、社会教育を行なう場である博物館のあり方が問われる。



3. 専門家によるポイント解説

(6) 博物館と地域発展

邱君妮 ICOM 京都大会準備室

博物館と地域開発のパネルディスカッションについて報告いたします。このパネルは 90 分間でした。まず、パネルの構成についてご説明させていただきます。最初に ICOM 会長から、なぜこのパネルが重要なのか紹介があり、その後、2 人のモデレーターが登壇してそれぞれのスピーカーのプロフィールを紹介し、その後それぞれに異なる質疑応答を行い、議論を深めるという形で進行了しました。

内容については、実は 2019 年、ICOM と OECD（経済協力開発機構）が一緒に『博物館、文化と地域発展、最大限の成果を求めて』というガイドブックを発行しました。このパネルディスカッションは、このガイドに関する内容を中心に展開しました。したがって、このガイドブックを事前に読んでいない参加者にとっては、理解するために少々時間が必要だという印象を受けました。ここでは、登壇したモデレーター 2 人とスピーカー 4 人、合計 6 人で議論したことを 3 つのポイントに絞って紹介したいと思います。

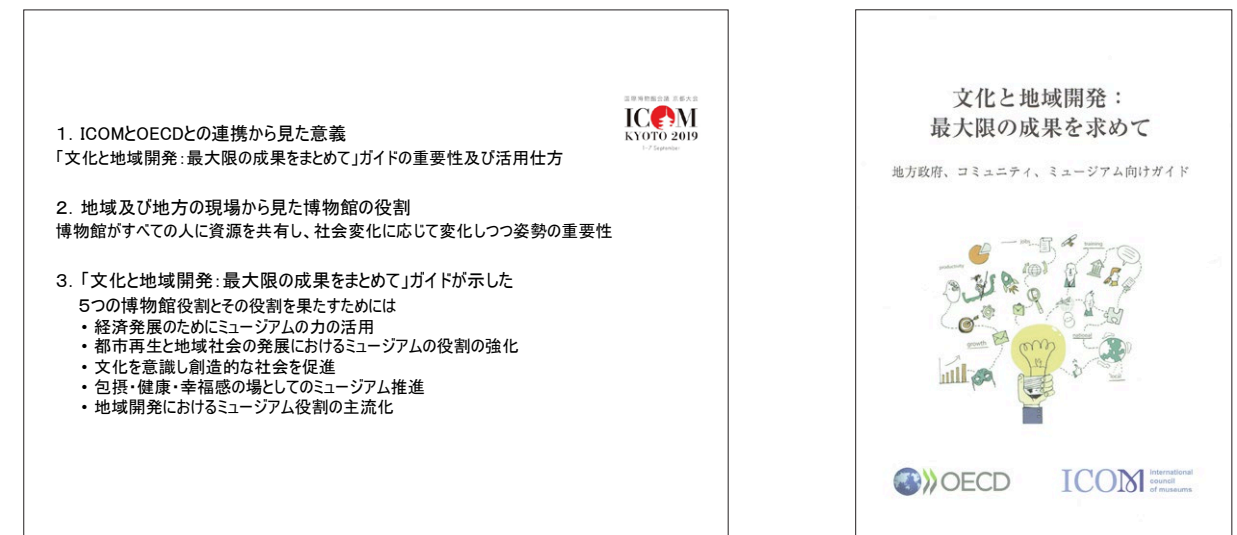
最初に ICOM と OECD との連携の意義についてお話しします。これまで、社会に対して博物館が果たすべき役割を考えると、現在の博物館の枠組みだけで考えるのでは不十分だということが指摘されてきました。そのため、ICOM と OECD との連携は、博物館の枠組にとどまらず、もう一步、この経済を中心とした組織と連携した上で、博物館がいかに異なる側面から社会に影響を与えることができるのか、どのように貢献できるのか、ということを検討できる意義があると思います。

そして、2 番目のポイントは、地方の現場から見た博物館の役割についてです。実はこの 4 人のパネ

ルリストの中、すごく大事だったのは、門川大作京都市長に登壇していただいたことです。門川市長以外のスピーカーは、ガイドブックの作成段階から関わっている方です。京都市長から地方政府の目線で発言を含めた議論は、とても面白いものでした。このガイドブックから一步離れて、客観的な目線で、京都市が独自に行っている文化行政から見たガイドブックは、一体地方政府や地方の博物館にとってどういう役割ができるのか。チェックリストや振り返りツールとして使えるのか。そういう現場からのコメント及び可能性の提示がすごく大事だと思いました。

最後に、3 番目のポイントは、ガイドブックでは文化と地域発展における博物館の役割を 5 つに分けて提示していますが、この役割を効果的に果たすために、何ができるかということです。このガイドブックには、地方政府の立場から何ができるかというポイントを示していますが、一方で博物館の立場から何ができるかというポイントも示すことによって、それぞれの立場からできることを行い、力を合わせて地域発展に向けた最大限の成果を求めています。このパネルディスカッションで議論したガイドブックは、ICOM 京都大会の会場で日本語仮訳を配布しました。現在、摂南大学の後藤和子先生の監修で日本語訳の改訂版を作成しており、また発行できたらあらためて皆さんと一緒に議論を深められればと思います。

私からの報告は以上です。ありがとうございました。



ガイドブック日本語仮訳版



3. 専門家によるポイント解説

(7) マンガ展の可能性と不可能性

伊藤 遊 京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センター

僕がファシリテーターを務めさせていただきましたパネルセッションでは、近年、非常に多くのミュージアムでも開催されている「マンガ展」というものを取り上げて、その可能性と不可能性ということを議論させていただきました。ゲストには、昨年、大英博物館で開催されて世界中で大きな話題となったマンガ展『The Citi exhibition Manga』を担当したキュレーターのニコル・クーリッジ・ルーマニエールさんと、韓国で発達しているウェブマンガの形式でウェブトゥーンというのがあるんですけど、その作家であり、釜山グローバルウェブトゥーンセンターのキュレーターでもあるナム・ジョンフンさんをお招きしました。また、僕と同じ京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センター研究員のユー・スギョンさんと、マンガミュージアムの立ち上げなど、マンガと社会をつなげる実践的な活動を行ってきた京都精華大学マンガ学部教授の吉村和真さん、そして僕が登壇しました。

議論は主に、マンガの生原稿、いわゆる「マンガ原画」というものをめぐって展開しました。特に2000年代以降、マンガ文化というのは、っこ付きの「芸術」として、つまりある意味パブリックな文化として扱われるようになっていきます。その背景には、マンガを含めたポピュラー・エンターテインメントに経済的な効果を期待するという発想があるわけですが、パブリックな文化と定義するに当たって、唯一無二の存在であるマンガ原画は、これまでの「美術」とか「芸術」という概念に当てはめやすい。そうしたこともあって、マンガ原画というものに注目が集まっています。

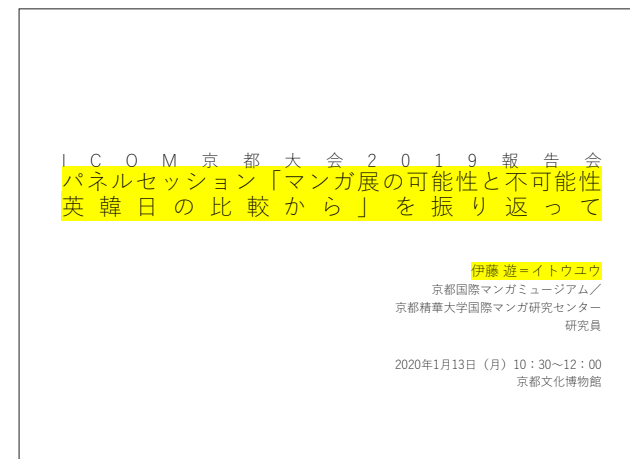
実際、このパネルセッションも、マンガを「メディア芸術」と規定し、マンガ原画のアーカイブ事業を進めている文化庁の支援がありました。

パネルセッションではまずルーマニエールさんから、彼女がキュレーションをしたマンガ展に関して、企画を実現の展示に落とし込むに当たっての苦労や工夫などが具体的に解説されました。ルーマニエールさんは、この展覧会においてマンガ原画というものは最も重要な要素であったとして、その理由を、「人間の手による創造物」であるから、と説明しました。一方、そもそもマンガのアナログ原画というものが存在せず、デジタルデータとして作られることの多い「ウェブトゥーン」を扱っているナムさんは、マンガ原画がなぜ重要だと思われるかということのいろいろ考えられていて、その理由を、マンガ原画は読者が最終的に目にする形になる前の、つまり創作プロセスの一部であるから、と解釈しました。創作プロセス自体はアナログな制作方法であろうとデジタルツールを使ったものであろうと存在するわけですから、ウェブトゥーンセンターでのウェブトゥーン作品の展示においては、創作プロセスが垣間見られる展示をする努力をされている、とおっしゃっていました。

マンガというテーマがICOMの大会で大きく採り上げられたということ自体、非常に画期的だったと思うんです。ただ、マンガというアクチュアルな領域だからこそ議論できたはずの様々なテーマについて、時間もなくて深められなかったというのは残念でした。今後につなげていきたいと思っています。

ぼくは、マンガというのは、近代以降のミュージアムっていう制度そのものを相対化する可能性を持っていると考えています。マンガミュージアムでは今度、館長である荒俣宏さんをテーマとする展覧会を開催する予定なのですが、展覧会の裏テーマは「ミュージアムとは何か」です。このテーマは正に、今回のICOMの大会での議論を踏まえています。

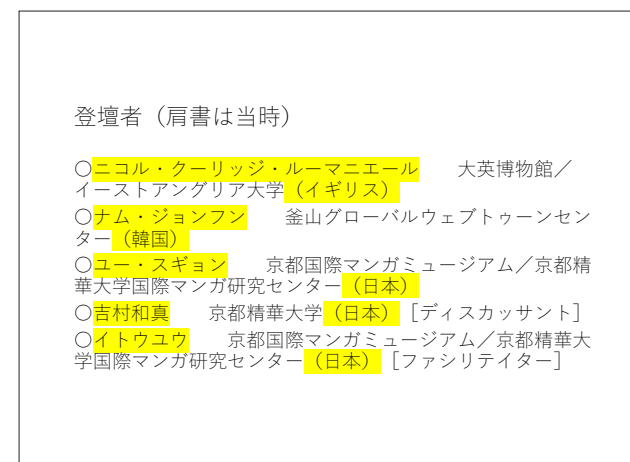
ちなみに、ICOMでのパネルセッションは文字起こしをしまして、国際マンガ研究センターの年次報告書に掲載される予定です。そこには、ミュージアム研究をされている武蔵大学の小森正樹さんと、北九州市漫画ミュージアムの研究員である表智之さんが、このセッションに関する論考を書き下ろしで寄せていただくことになっています。



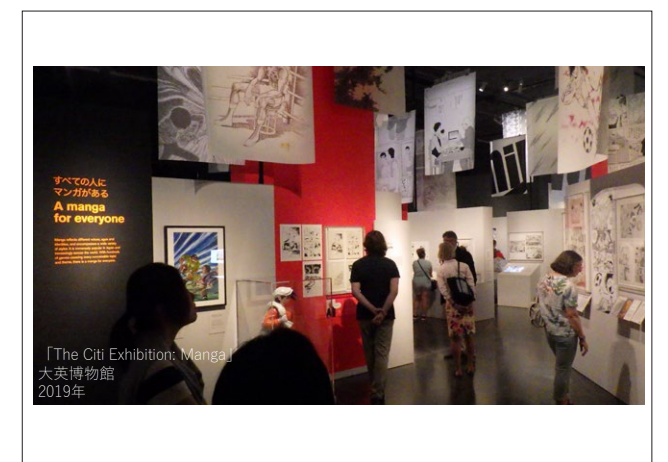
1



2



3



4



5



6



7

なぜ「マンガ原画」が重要なのか

○ルー・マニエール氏（大英博物館）
原画＝「人間の手による」創造物だから

○ナム氏（釜山グローバルウェブトゥーンセンター）
原画＝創作プロセスの一部だから

8

深められなかった議論

- 「デジタルとアナログ」
- 「ポピュラーカルチャーとファインアート」
- 「文化と産業」

これらは、一般のミュージアムにとってもきわめて今日的なテーマだと思われる。

9

議論の継続

今春から、京都国際マンガミュージアムで「荒俣宏展（仮称）」を開催予定。

（裏）テーマ：〈ミュージアム〉とは何か！？
テーゼ：プレミュージアムこそ超ミュージアム！
展示されるモチーフ：「驚異の部屋」（ブンダーカマー）、三田平凡寺（みた・へいぼんじ）、同人誌マンガ……

10



(8) 質疑応答

コメント1

「登壇者の皆さんには5分間で簡潔におまとめいただいて、本当に大会に参加しておられなかった方も大会の議論の雰囲気伝わったのではないかと思います。一つコメントするとICOMの大会の基調講演、それからプレナリー、パネルディスカッションで議論をされたことと、それを今の日本の博物館の現状に照らしてみると、やっぱり温度差あるなとお感じになった方、結構たくさんいらっしゃると思います。だからその温度差がどこに起因しているのかを、これからも日本の博物館の関係者、あるいは博物館をサポートして下さるお気持ちをお持ちの一般の方たちとともに共有しながら、今後は日本の博物館がよりよくなっていくためにどうすればいいのかを考えるプラットフォームが必要かなと考えます。そのためにICOMの国際的な博物館のコミュニティとどういうコミュニケーションを持っていくことが必要なのかを私たちも一生懸命に考えるべきだとあらためて感じさせていただきました。」(半田昌之 日本博物館協会)

質問1

「基本的なことの質問をしたいのですが、ICOM京都大会準備室の方々、この大会のために大変なお仕事されたと思いますが、このような組織は今後も存続するのですか。」(村野正景 京都文化博物館)

質問1への回答

「この組織は時限的なもので、今年の3月で解散

し、機能の一部は日本博物館協会に引き継がれます。」(関谷泰弘 ICOM京都大会準備室)

質問2

「今後はどういう活動の方向になっていくのでしょうか。今回のICOMでなされていた諸外国の発表を聞き、大変勉強になったのですが、定期的に海外のことを、日本語で伝えていただくような機会を設けていただけるとうれしいと思います。具体的に今後のICOM事務局は、どんな活動をされていくのでしょうか。」(村野)

質問2への回答①

「ICOM日本として、ICOM日本委員会がございます。そちらが実質、日本博物館協会と一緒に4月以降は国際的な交流事業を進めていくことになります。我々、京都大会に関わっていたものとして、今年の3月までにいろいろと今後、交流の場としてのプラットフォームを用意していきたいと考えています。一つはウェブサイトです。そちらで京都大会のアーカイブを集積して、誰でも見られるようにしたいということ、それから国際的な情報をそちらで発信していけるようにしたいと考え、進めております。ほかにも今後もICOM日本委員会でシンポジウムとか勉強会とか、そういう形で国際交流的なものを担っていけたらと考えています。」(関谷)

質問2への回答②

「私もICOMに京都大会招致の前から関わっていた者として、ICOM日本委員会が軸になって

いかなければいけないとは思いますが、しかし、質問2の回答として、何が一番大事なことから、どう答えるかを考えたとき、やはり一番は、村野さん自身がアクションを起こすことだと思います。それがまさに今日です。僕は今日のこの日をすごく楽しみにしていました。その意味で、企画された村野さんをはじめ関係者の皆さんには敬意を表します。東京でも、例えば東京都美の稲庭さんがまた別の企画を行っています。どんどんこうやってボトムアップで、いろんな人たちがそれぞれで動いていくという形が望ましいと思います。ICOM日本委員会ももっと若手を巻き込み積極的に活動していく必要がありますが、本質的には一人一人が行動していくということが重要なんだと思います。」(五月女賢司 吹田市立博物館)

質問2の回答②へのコメント

「私は個人の努力はすでに多くあるので、ボランティア的な努力を個人に求めるのではなく、熱意をもった個人がきっちりと動けるような体制づくりをどうするかという観点のほうがもっと大事だと考えています。」(村野)

質問3

「私は考古・歴史の国際委員会の担当だったため、ずっとそこに張り付いていて全体はよく分かりませんでした。考古・歴史の博物館委員会について言うますと、割り当てられた部屋が50～60名の部屋でしたので、日本は考古や歴史の関係者が多くて入りきれないんじゃないかと心配しました。しかし結局はその部屋で問題なく、日本の方

は10名ぐらいでした。それで質問ですが、今回のセッションのうち、日本の方あるいは博物館関係者にとって、どこのセッションに人気があったか、参加者が多かったか、わかるようならお教えください」(岡村勝行 大阪市博物館機構)

質問3への回答

「わかる範囲で回答します。まず1800人という日本の参加者は、実はほとんどの方が1日券でした。海外から来られてる方はフルで参加されてる方が多かった。実際に、1日に日本人がいたのは大体、500人くらいずつだったので、実は全体としてはそれほど大きくなかったのかもしれないです。あとは国際委員会のセッションのとき、常にパネルディスカッションや全体セッションがありましたので、そちらに日本の方は参加することが多かったんじゃないかなと思います。多分、偏りもあったとは思いますが。自分は例えばMRPに参加していましたが、日本の方はそれほどいなかったです。補足ですけれども、大会中撮影した写真や映像をみると、たくさんのアジア人の参加があったことがわかります。誰が日本人かは、判断つきにくいですが、この映像や写真からは、国を超えてアジアと欧米の交流がよくできたのではないかな、そのようなイメージを受けております。」(関谷)

質問4

「非常に面白く聞かせていただきました。京都新聞社では始まる前からいくつか紙面を通じましてこの大会の意義を伝えるようにしましたし、期間

中は、現場で記者がだいぶ取材をしていたと思います。今までの質問とも関連しますが、足元の国内向けに今後、どういうふうに発信を予定されているのでしょうか。

というのは、開催前に出張先で、具体的に言うと岡山、広島、福岡、熊本などの博物館の方とお話をしまして、「ICOM、どうされますか」と聞きますと、一様に参加費が高いということでした。そうするとせっかく貴重な議論がなされていても、それが遠い世界のものになっている関係者の方が全国におられるということです。それで、本日のような内容のものを全国展開することを検討されると、もうちょっと議論の広がり等があるかなと思いました。先ほど事務局が3月で閉じられるということでしたので、そこも含めて今後、どういうところ、考えてらっしゃるのかなと思いました。」(内田孝 京都新聞社)

質問4への回答

「情報発信に関しましては、ホームページでプレナリーセッションや基調講演などを日本語字幕を付けて公開しようと考えて、今、準備をしているところです。ICOM 京都大会に参加できなかった方も日本語で実際、どういう議論があったかをウェブ上で見るができるようにしたいと、まずは考えています。それと併せまして、実は今回の報告会兼ワークショップは1回目と書いてないのですが、気持ちとしてはシリーズ化していきたいなと思っています。まずは今回、ICOM 京都大会の開催地で1回目をやりまして、今後も東京なり大阪なり、九州なりで、このような会を開催し

たいと言っていたいただける方がいればそちらと協力して一緒にやりたいというのが我々の気持ちではあります。ICOM 日本委員会としてもそういうところに協力できていたらなと考えています。本日の経験を踏まえて改善しつつやっていきたいと考えているところです。」(関谷)

質問5

「五月女さんに質問です。今回、ミュージアムとは何かという定義について話し合われたのは大きい問題と考えています。特にこの質疑応答の冒頭で、ICOM と日本でちょっと温度差があるというお話が出ていたので、その観点から少し質問をさせていただきます。

五月女さんの発表では、ミュージアムの定義が機能的定義から社会的役割の定義に変わったとありました。日本の博物館法の定義は、それこそ機能的です。ICOM の定義は現行の前の定義でも、既にコミュニケーションということに触れていますから、その時点ですでに日本と温度差があると思っています。それで、今回の改定案について、日本との温度差という視点から、これは日本のみんなが少し意識しておいたほうが良いという点について、五月女さんが感じられていることが特にあれば教えてください。」(三河内彰子 東京大学)

質問5への回答

「大変大きな話なので今、どういうふうに頭の整理をして話をしようか迷っているところです。そもそも日本が博物館に限らずいろんな面で国際的でないところから、そして博物館もすごくガラパ

ゴス化しているところがあって、そうしたところから追いついていかなければなりません。いろんな国際情勢を知った上でこの博物館の定義を見ると、定義改定の背景が理解できると思います。ですから、まずは国際情勢の理解からしていかなければいけないのです。日本でも、例えば今年の4月に国立アイヌ民族博物館が開館します。そうしたアイヌの国立博物館設立の動きがどういった背

景で起こってきたのか。これは国際情勢の中でどうなのか。国としてどうなのか、オリンピックヤーだからそうなのか、いろんなところを考える必要がある。とにかく新しい博物館定義案がどのように日本の中で当てはまるのかということと、日本の国内情勢と国際情勢を踏まえながら、関係者一人一人が意識して考えていくことが重要なんだろうと思います。」(五月女)



4. ワークショップ

(1) ワークショップの コンセプトおよび概要

村野正景 京都文化博物館

第1部の報告をうけて、第2部では、「ICOMを振り返り、一人一人がミュージアムとその役割について考える。考えたことをもとに明日から行動する」をコンセプトとしてワークショップをおこないました。

本ワークショップは、佐藤優香（東京大学）と高尾戸美（多摩六都科学館）によるプログラムデザインおよびファシリテーションで、①問いかけ、②第1セッション「博物館の新しい定義案」、③第2セッション「みんなで考えたいこと、私がもっと考えたいこと」、④第3セッション「自分と向き合う」という順に実施されました。

「問いかけ」は、村田麻里子（関西大学）と植田憲司（京都文化博物館）の2人から、ICOM京都大会を振り返って、疑問に思ったこと、重要だと思ったことを発表してもらい、ワークショップの口火を切っていただきました。

つづいて、第1セッション「博物館の新しい定義案」では、グループワークとしてICOM京都大会を振り返り、新定義案を題材として、話し合ってもらいました。あらかじめ現行の定義と新定義案を配布し、「新定義案は、前と何が違う？」「それは何を換えようとしたのか？」「どこにポイントがあるのか？」「ミュージアムは社会でどのような存在になっていくのか？」などを投げかけながら、グループで話し合いを進め、その結果をグループごとに発表してもらい、全員で結果を共有

しました。

第2セッション「みんなで考えたいこと、私がもっと考えたいこと」もグループセッションです。ワークショップ開始前に、「みんなで考えたいこと」と「私がもっと考えたいこと」の2点について、参加者全員に回答してもらい、その回答内容をもとに、興味や関心の近そうな方々を集めてグループ分けしました。関心あるテーマは重複もありましたが、おおまかにわければ、「新博物館定義案」「博物館と地域」「持続可能性」「デコロナイゼーション」「地域発展」の6つのグループができました。

第3セッション「自分と向き合う」では、自分の内面と向き合い、本日の報告会やワークショップで得たことを、自分ごととして、自分の行動そして周りの人々への刺激を生むことへつなげることを目指すセッションでした。各自が想いを持ちかえるために、特別なキューブを用意しました。そして、キューブの各面に記された問いへ、自ら考えた回答を書き込みました。最後にそれを他の参加者と共有しました。



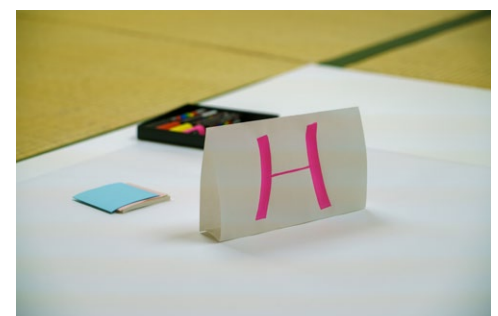
受付の様子



時間	活動
13:30	ガイダンス
13:40	問いかけ 「ICOM2019を振り返って：3つの問いかけ」（村田 麻里子） 「博物館定義は誰のものか」（植田 憲司）
13:50	《第1セッション》 ICOM京都大会を振り返り、新定義案をきっかけしたグループセッション - 新定義案は、前と何が違う？ ・ それは何を換えようとしたのか ・ どこにポイントがあるのか - ミュージアムは社会でどのような存在になっていくのか - ミュージアムは誰のものか グループごとに1分プレゼン
14:20	ミニブレイク、部屋移動
14:30	《第2セッション》 みんなから提出された関心をもとに、関心の似た人たちでグループセッション - 関心メモの紹介 - グループ分け発表 - テーマごとにセッション グループごとに1分プレゼン
14:35	ミニブレイク、部屋移動
15:10	《第3セッション》 振り返りのキューブをつくり、ペアセッションを複数回 - キューブづくりの説明 - 各自制作しながら振り返り - ペアで振り返りを深める - 残りの1マスを入力 グループごとに1分プレゼン
15:20	ミニブレイク、部屋移動
15:30	《第3セッション》 振り返りのキューブをつくり、ペアセッションを複数回 - キューブづくりの説明 - 各自制作しながら振り返り - ペアで振り返りを深める - 残りの1マスを入力 グループごとに1分プレゼン
16:10	キューブ撮影会（全員で撮影）
16:30	終了、事務連絡



会場の様子



(2) 実録ワークショップ

(2) - 1 イントロダクション

村野：これより、第2部のワークショップを始めます。コンセプトは、ワークショップを通じて、一人一人がミュージアムの役割について考え、考えたことをもとに明日から、今からでも行動する

ことです。ファシリテーターは、佐藤さん、高尾さんです。

佐藤：今日はよろしくお願いします、佐藤優香です。

高尾：高尾戸美です。よろしくお願いします。



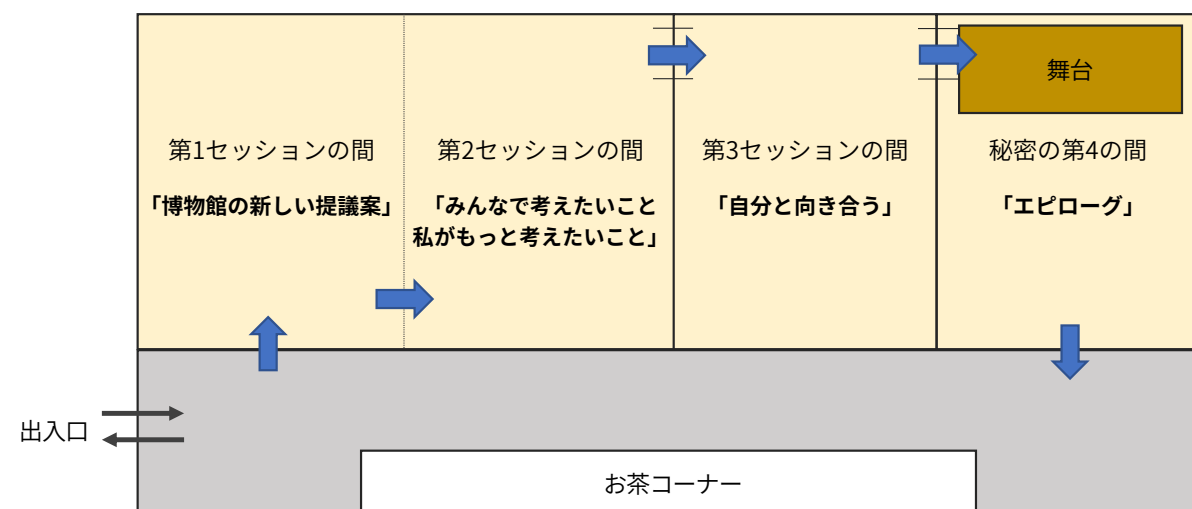
ファシリテーターの佐藤優香、高尾戸美



ワークショップ開始

佐藤：今日は、ICOM 京都大会を振り返りつつ、振り返るだけでなく、明日から一人一人がどう動いていけるかを考える場にしたいと思います。ワークショップは、3つのセッションで構成しています。最初のセッションはこの部屋で行います。次のセッションになると隣へ移ります。最後のセッションはその奥へ移動します。そして、さら

にもう1つ、秘密の第4の部屋があります。じわじわとあちらへ移動するにしたい、みんなで進化していこうという計画です。進化するのですが、ちょっと前に戻ることもできます。遡ったときに軌跡としての地層が残っていないとわからないので、地層を残すために模造紙とペンを置いてございます。



会場の平面図

(2) - 2 問いかけ

佐藤：ICOM 京都大会では定義の改定が大きな議論になりましたが、わたしたちもそこから始めると話やすいかと思いますので、議論の前に問いかけとして、お二方にプレゼンテーションしていただき、それを受けてグループセッションという流れにいたします。

①村田麻里子（関西大学）

「ICOM2019 を振り返って：3つの問いかけ」

私はICOM2019にはほぼフル参加したんですが、主に3つのことを考えました。1つ目は、博物館の新定義案が日本にどういう意味や影響をもたらすか。2つ目は、日本のミュージアムにおけるデコロナイゼーションや多様性への取り組みについてどう考えるか。そして3つ目は組織の話ですが、持続可能なミュージアム・コミュニティをつくる方策についてです。これら3つの観点から、簡単な問いかけをしたいと思います。

博物館の新定義案については、午前中に五月女さんから詳しい資料とお話がありましたが、これを日本でも議論することが、結果的に日本のミュージアムの状況を逆照射し、あぶりだしてくれるんじゃないかと思います。現行の定義と今回不採択にはなった新定義案では、何が決定的に異なるのか。異なる点は沢山あると思うんですが、やはり一番大きいのは、社会との関係にかなりの比重が置かれた定義案が出てきたということだと

思います。現在の定義は博物館の機能を主とした定義だと思うので、新定義はかなりのチャレンジをしたなと思い、私は感心しました。でも、新定義案を読んで、そもそもこれは博物館の役割なのだろうかと思った人が、実は結構いるんじゃないかなと思うんです。この辺りを率直に話しあうことはとても大事な事だと思います。

現行の定義と新定義案とを、次のスライドに並べておきましたけれども、なぜこういう変更が必要だったのかというところから考えてみるのもいいと思います。結局、採択は延期にはなりましたが、定義を変えること自体や、変える方向性については、あの会場ではおおむね賛成だったのかなという印象を受けました。一方で、うちの館はこの定義案にはまったく該当しない、というような感覚をお持ちの方も恐らく多いのではないかと思います。では具体的にはどの部分がどう該当しないのだろう、違和感があるのだろう、ということをお話するといいなと思いました。このICOMの定義が、例えば助成金を取るときに直接的に影響を及ぼすという国もあるんですが、日本はご存じのように博物館定義というのがありますので、それとの関係はどうなんだろう。あるいは新定義案の方向性になったときに、日本の今の博物館定義はどうなるんだろうかということも考えてみたいと思います。

2つ目です。デコロナイゼーションについて考えるセッションですが、今回登壇した人たちのなかに、アジア関係のミュージアム関係者が、インドを除いていませんでした。インドの話は、結局はイギリスとの関係についてになるので、アジア内におけるデコロナイゼーションの問いがなかったという印象を私は持っています。デコロナイゼーションと聞くと、つい他人事のように思いがちですが、実は日本にとっても重要な問題だと思います。日本では、もちろんアイヌの遺骨返還問題などありますが、返還問題以前に、そもそもこのことに関する問題提起や対話をするための空間があまりに足りないのではないかと私自身は思っています。例えば日本の植民地主義を語り続ける回路がもっと必要だと思いますし、今回のあいちトリエン



ナーレの不自由展の騒動のように、問題提起すらできないような状態になってしまうのはなぜだろう、と。多様な語りをミュージアムが持っていることをもっと重視すべきだと思います。

併せて、歴史博物館や都市博物館に行くとも思うんですが、そこに住んできた人たちの話がいつも足りないな、と。在日コリアンにしろ、満蒙開拓移民にしろ、アイヌにしろ、日本の中の多様性についてきちんと歴史博物館や都市博物館が語っていくべきなんじゃないかなと思います。もちろん、満蒙開拓移民の人たちは自分たちが「満洲」に渡ったことを語りたがらないという別の問題もあるんですが、こういう人たちが、かつていた。なぜ、いたのか。何があったのか。オリンピックを前に急に多様性、ダイバーシティが必要だ、と言われるようになりましたが、まずはこのような議論なくして、新しい定住外国人を含む多様なコミュニティという位相は議論できないんじゃないかと個人的には思っています。そういう意味で両者は地続きにあると思います。

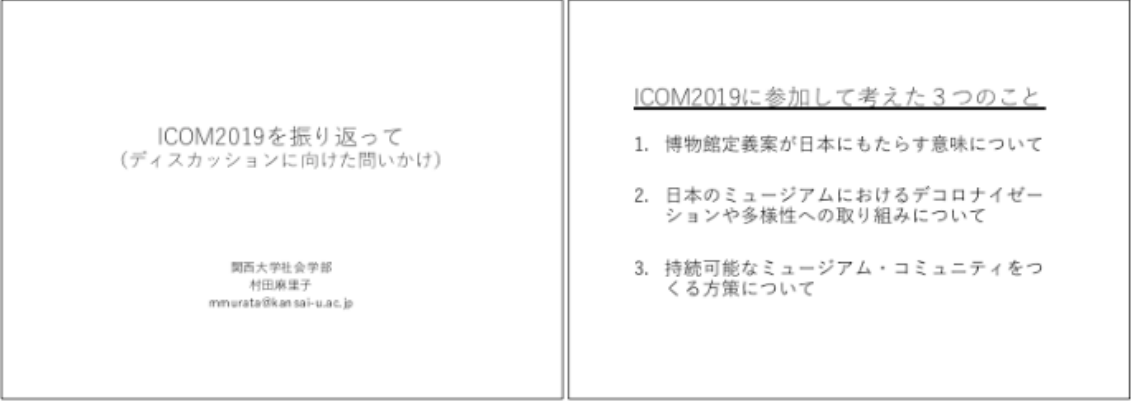
3つ目は組織の話です。先ほども少しフロアで議論になりましたけれども、ICOM 日本というのを今後機能させるにはどうすればいいのだろうかということです。今回、新定義案で大きな役割を果たしたのが、それこそ ICOM フランスや ICOM イランという、国単位の ICOM 中の議論でした。別にナショナルな単位で固まる方がいいということでは全くないんですが、やはり ICOM 日本というものがもう少し機能して、国の異業種のミュージアム間の対話、それから日本と他国との対話みたいなのを促進する組織になるにはどうしたらいいのかということを、私たち一人一人が考えるときが来たと感じます。

とりわけ重要なのは、日博協と ICOM 日本の関係が組織的にどうあるべきなのかです。例えば、今は ICOM 日本だけの専任の運営スタッフはいないわけですね。そういうことも含め、組織の在り方について考えるべきだと思います。あと、国際委員会のほうで海外とつながってらっしゃる

方は沢山いるんですが、そうすると国際委員会にはしっかり参画するんだけど、異業種のミュージアムがまとまって ICOM 日本という単位で動くのは難しいのかなと。ここを今後はどう考えるかは重要だと思います。

以上、3つの問題提起を簡単にさせていただきました。

最後に、皆さんのお手元に、午前中に配った交流ブースに関する冊子があると思います。今回、なるべくいろんな関係者が交流できるようにということで、京都準備室が交流ブースを作りました。残念なことに、あまり会場内の場所がよくなかったんですが、実はここにいろいろ交流の仕掛けを作ったんです。例えば、インタラクティヴパネルです。「あなたのミュージアムはどの程度オーディエンスしてると思いますか」を、100 パーセントから 0 パーセントのどのあたりに該当するか、国別の色でシールを貼ってもらうものや、「あなたの博物館にはオーディエンスの多様性はあると思いますか」、「スタッフの多様性はあると思いますか」についてイエス、ノーでシールを貼ってもらうものなどです。これらの質問は、準備室でやったワークショップが元になってるんですが、個人的にはどれもいい問いだなと思っています。これらも議論のネタになるのではないかとあって、最後にご案内させていただきました。

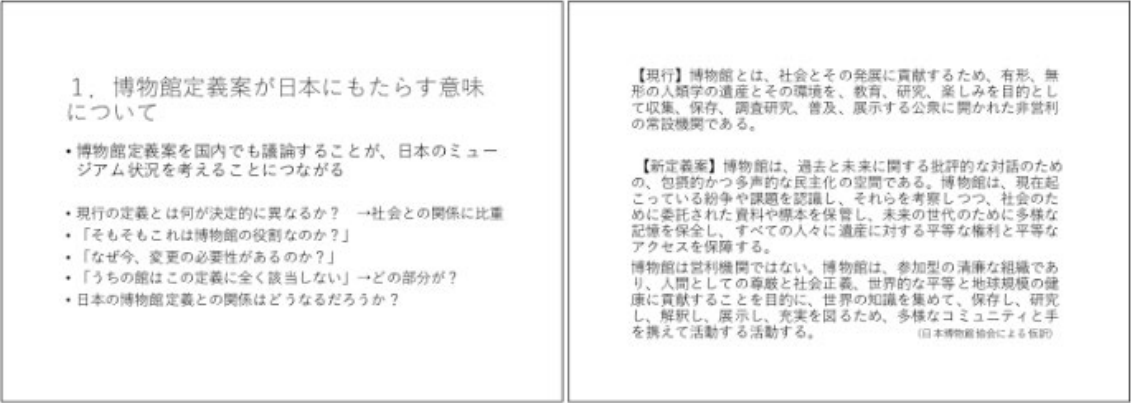


1

ICOM2019に参加して考えた3つのこと

1. 博物館定義案が日本にもたらす意味について
2. 日本のミュージアムにおけるデコロナイゼーションや多様性への取り組みについて
3. 持続可能なミュージアム・コミュニティをつくる方策について

2



3



4



5

さいごに…交流ブースについて



6

②植田憲司（京都文化博物館）
「博物館定義はだれのものか」

今回、午前中の報告会のところで出てきたと思うんですけど、ICOM 京都大会で新しい博物館の定義に関して採択を延期するということで議論が紛糾し、私自身も参加していて、なんでこうなったんだろうとクエスションマークがついたかたちでした。既定路線としてはそのまま、定義は変わっていくのかなとは思んですが、あらためて考えたことは、この博物館の定義というのが ICOM で議論がされて、こういう状況になったんですが、この博物館の定義っていうのは一体、「誰のものなのか」ということなんです。

今、村田先生からご紹介いただいた定義についてお話してもらったのですけれども、それをもう少し引いた目線で見たときに、この博物館の定義というものが一体、「誰のものなのか」というのが私にとって疑問でした。ある意味で挑戦的な問いかもしれないのですが、それを考えていただければいいなと思いました。おそらくこれは、「博物館は誰のものか」という問いともつながってい



ると思うんですが、「博物館の定義が誰のものか」というのは、あまり考えることがないんことではないかと思い、提案として挙げてみました。例えば、博物館の定義は市民のためとかいうふうな感覚もあるし、あるいは博物館職員のためかもしれないし、あるいは文化行政に携わる人のものかもしれないし、でもそれでいいのだろうかとか少し疑問を持ってみたい、違和感を持ってみたいすること。そうしたことを、皆さんに問いかけということでさせていただきました。



(2) - 3 第1セッション
「博物館の新しい定義案」

①グループワーク

高尾：お二方から問いかけをしていただきましたが、みなさまそれについて思われることがあるといいます。今までの定義と提案されている定義を比べて何が違うのか、そこにはどんなポイントがあるのか、ミュージアムは社会でどのような存在になっていくのかなどお話しください。さっそく声にして発していただく時間を設けます。これから約30分間でお話いただくのですが、その後、1グループ1分でプレゼンをお願いします。目の前の模造紙と付箋はご自由にお使い

ください。プレゼンのためにキーワードを書き留めておいてください。

佐藤：プレゼンでは、問いへの答えを出していただくのではなく「うちのグループではこんなやりとりがありました」と、やりとりを紹介しあうイメージで考えてください。ここは答えを出す場というよりは、答えに至る道筋を今日いっぱい持って帰るというふうにお考えください。

高尾：模造紙は、プレゼンのために立派に仕上げていただかなくて大丈夫です。メモとして使ってください。

●現博物館の定義（ICOM ウィーン大会 2007 採択）

A museum is a non-profit, permanent institution in the service of society and its development, open to the public, which acquires, conserves, researches, communicates and exhibits the tangible and intangible heritage of humanity and its environment for the purposes of education, study and enjoyment.
(ICOM 日本委員会訳)

博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する公衆に開かれた非営利の常設機関である。

●新たな博物館の定義案（ICOM 京都大会 2019 にて提案）

Museums are democratizing, inclusive and polyphonic spaces for critical dialogue about the pasts and the futures. Acknowledging and addressing the conflicts and challenges of the present, they hold artefacts and specimens in trust for society, safeguard diverse memories for future generations and guarantee equal rights and equal access to heritage for all people.

Museums are not for profit. They are participatory and transparent, and work in active partnership with and for diverse communities to collect, preserve, research, interpret, exhibit, and enhance understandings of the world, aiming to contribute to human dignity and social justice, global equality and planetary wellbeing.

(仮訳)

博物館は、過去と未来に関する批評的な対話のための、民主化を促し、包摂的で、様々な声に耳を傾ける空間である。博物館は、現在起こっている紛争や課題を認識し、それらを考察しつつ、社会のために託された資料や標本を保管し、未来の世代のために多様な記憶を保全し、すべての人々に遺産に対する平等な権利と平等なアクセスを保証する。

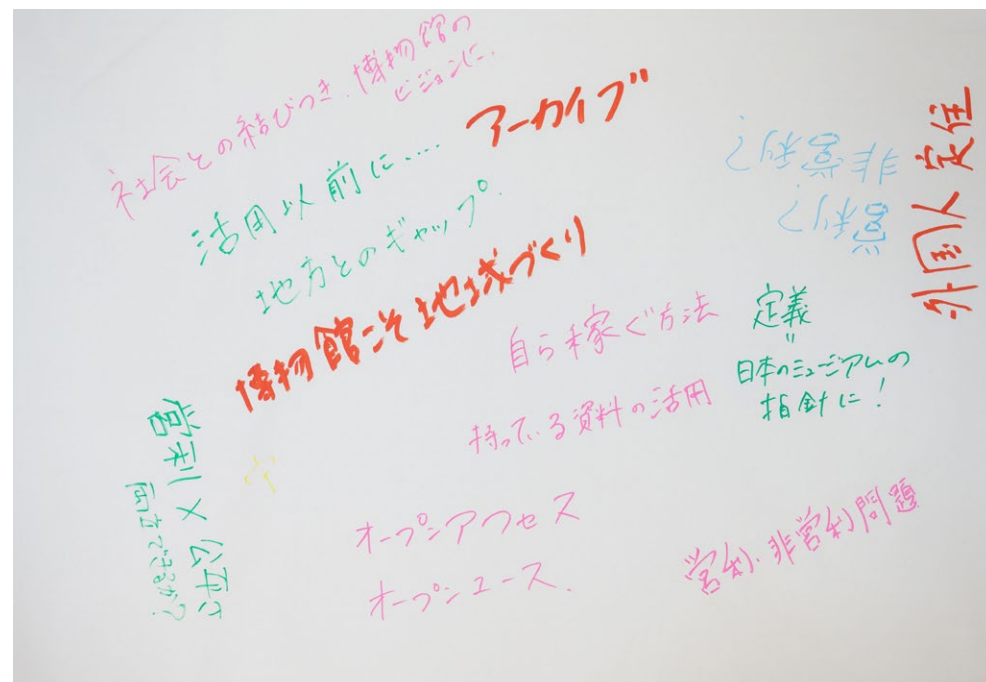
博物館は、営利を目的としない。博物館は、開かれた公明正大な存在であり、人間としての尊厳と社会正義、世界的な平等と地球全体の幸福に貢献することを目的に、多様なコミュニティと手を携えて収集、保存、研究、解釈、展示並びに世界についての理解を高めるための活動を行う。

②グループ発表

<グループ1>

日本では、大きな都市には登録博物館や公開承認施設のような博物館があると一般的に思われていますが、博物館相当施設もなく、類似施設があるだけという例もあります。そのような都市で、博物館を新しくこれから造っていかうとする中で、ICOMの定義案に新旧問わず「営利を目的としない」と書かれている点は、足かせになるのではないかと心配します。営利を目的としないと言われるとそもそも何もできなくなる可能性があります。今、厳しい財政状況の中で、建設費用を含む施設整備費に対して公費の投入が困難な状況にあります。また、維持管理費についても公費の投入は困難な状況です。そのような中で、この定義を守って博物館を造ろうとすると、どんな歴史都市ですら今後博物館を造ることができなくなります。他の博物館の方々のお話をお聞きしておりますと、画像の使用料を頂いておられるとか、スポンサーを見つけるなどの努力をしておられます。一方で、地方の博物館となると、資料整理だけで手一杯で、稼ぐ、稼がないという話にもなりません。案に示されているような高尚な定義までなか

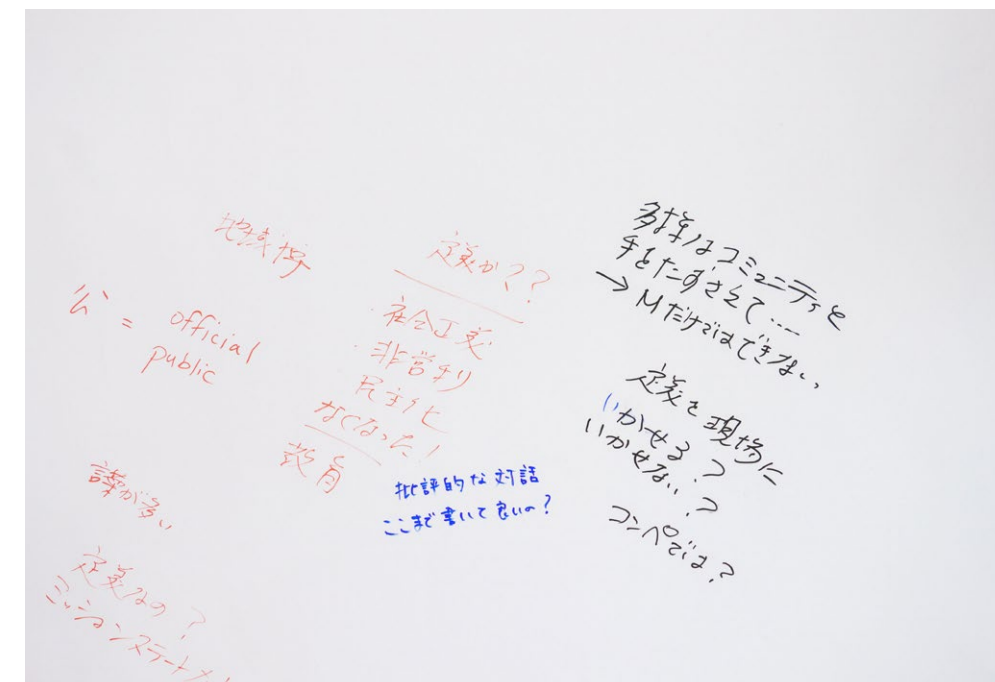
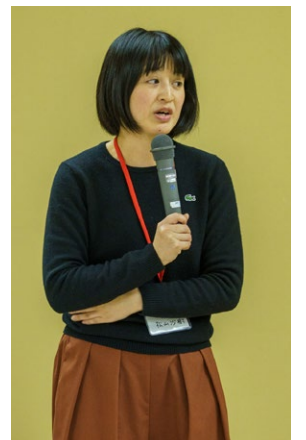
なか繋がらないので、地に足を付けた定義が必要ではないかと思います。



<グループ2>

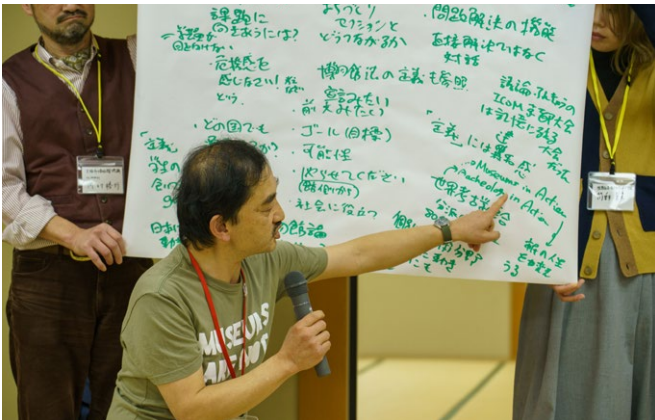
あまりまとまってないのですが、いくつか意見が出ました。まず定義の中に入っている言葉について、例えば「社会正義」という言葉が入っていることに疑問が出されました。また先ほどのグループでも出ていましたけれども、非営利つまり営利を目的としないという言葉が定義のなかに入っていることについても話題に上りました。ただ他の意見としては、世の中のさまざまな定義を見てみたときに、長年文面が変わっていないものもあるよねと。そうしたものを例として見たときに、今回の「定義」として示されている中で、例えば社会正義について言えば、その時代にとって「社会正義」とは何を指すのかは変わってくると思うので、その時代や地域それぞれが「定義」に照らし合わせて、じゃあ自分の国ではどういうことができるかを柔軟に考えればよいのではないかという意見も出されました。また「教育」という言葉が出てこないという点も話されました。啓蒙的な、一方的に教えるという「教育」という言葉を避け、educationという言葉が抜けたんじゃないかと。ですがそれでもやはり「定義」というものは、

いろんな地域に影響を持ってくるものであると考えるならば、やはり教育という言葉は入っていたほうが良いのではという意見もありました。あとは話し合いの最後のほうで、今回の定義案が、博物館は多様なコミュニティと手を携えていろんな活動をしていくべきだということをうたっている点にも注目しました。ミュージアムの現場にいると、ミュージアムだけではなく外の色々なコミュニティが協力しながら活動していくことの大切さは感じる。そうした意味では、まさにこの部分については、新しい定義案が、これからのミュージアムにとって何らかのバックボーンになるかもしれないという意見も出されました。



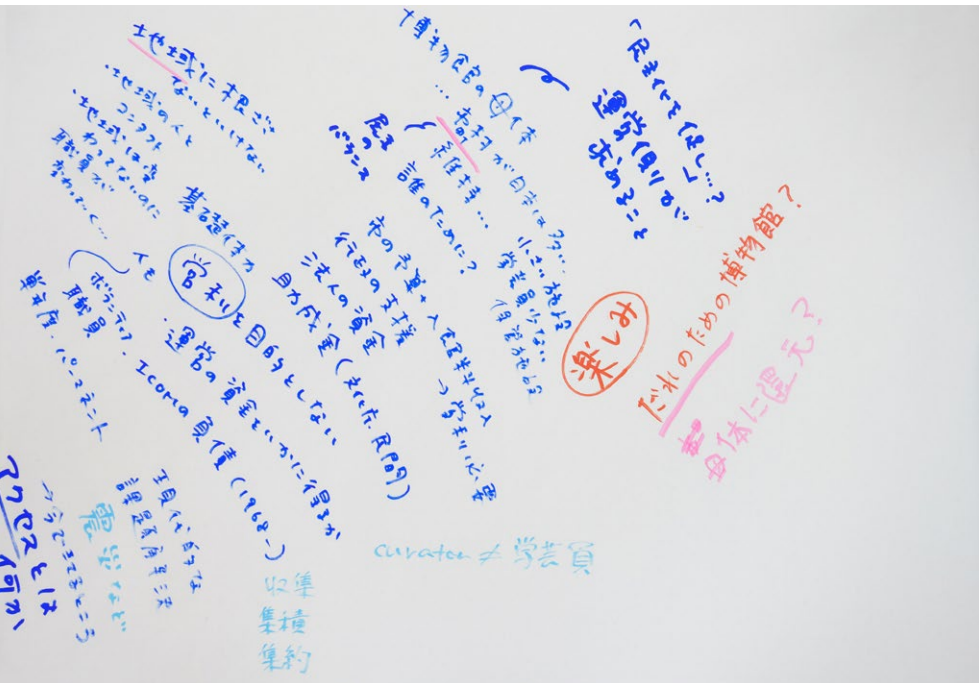
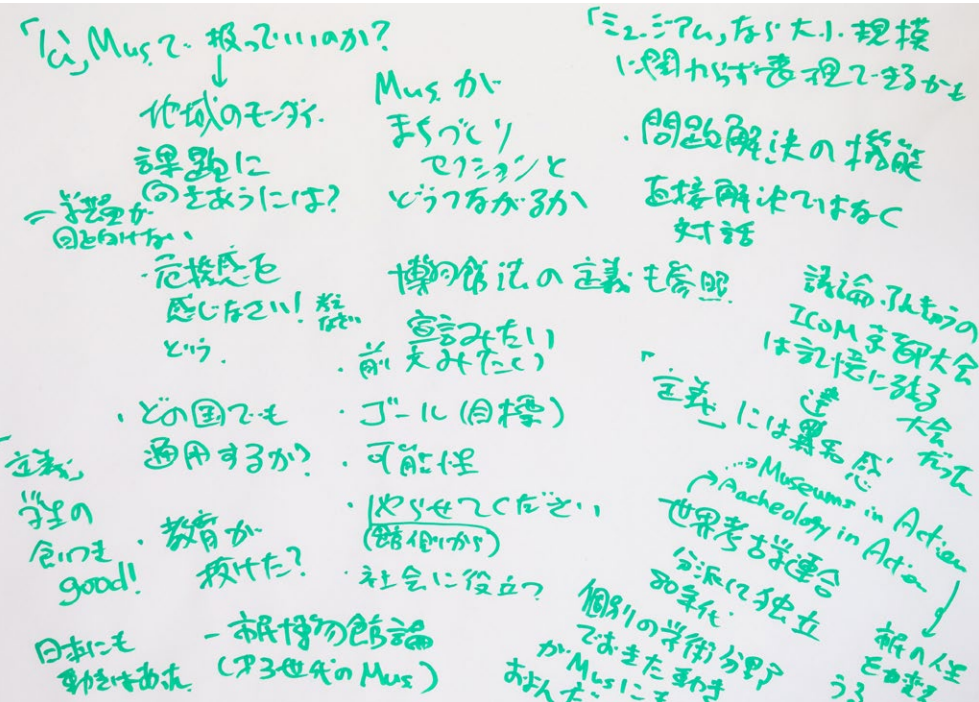
<グループ3>

博物館は地域の問題・課題に向き合う、取り組むというような話が博物館の新しい定義で出ている。でもそれが公立の博物館、あるいは公的な博物館で本当にできるかどうか、難しいかもしれないというような話がありました。一方、大阪市博物館機構の岡村勝行さんからは、世界の考古学は伝統的な考古学から80年代に大きく変わっていった、その時に Archaeology in action ということをやッチフレーズに動いた、つまり今までとは違う動きをするということを主張したという話ができました。それにならえば、博物館というよりミュージアムという方が言葉としては据わりが良いので、”Museum in action” と称して、人の人生を変えることができる可能性さえあるぐらいの、そういう博物館を目指していきたいというような話になりました。



<グループ4>

こちらでは「楽しみ」という言葉が定義の中から消えたところから、博物館は誰のためのものということが議論されていきました。その中で、営利を目的としないというのは先ほども挙がっていましたが、運営のための資金をどのように得ていくか。それが担保されなければ博物館の活動自体の持続ができないというところで、博物館の運営母体がどうであるとか、そういったことを、いろいろとみんなで話し合ってきたところです。それがやはり誰のための博物館であるかというところにまた戻ってきて、この日本の博物館は、市町村立など、公立の博物館がたいへん多くて、その母体に還元するということの意味を改めて、自覚していこうということです。ありがとうございました。

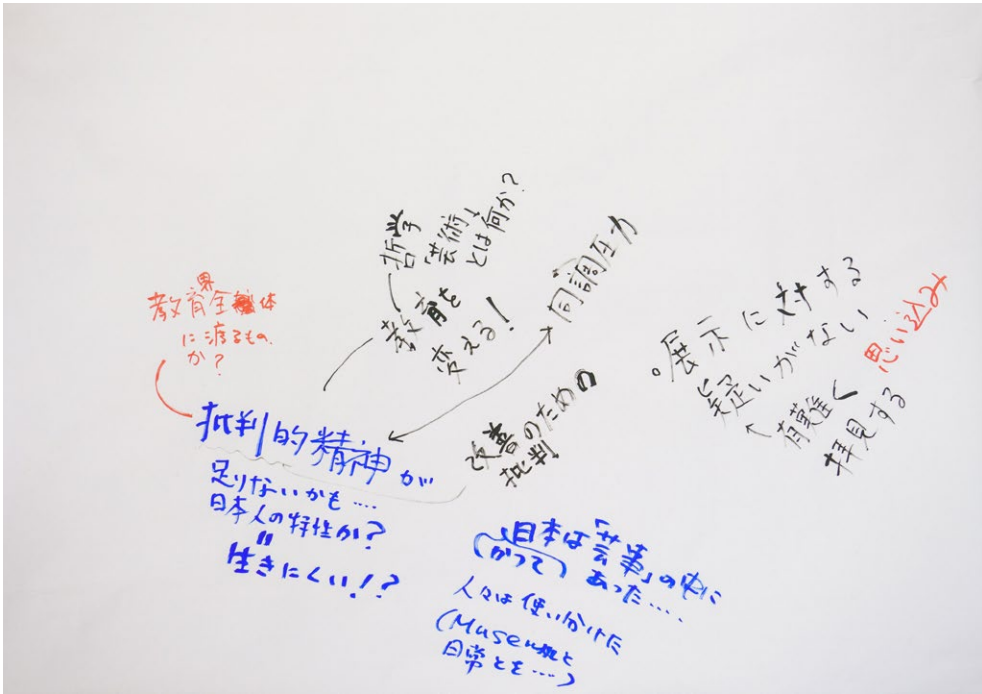


＜グループ5＞

われわれの班は新たな定義のところにありまし
た批評的精神、批判的精神という観点からこの問
題を検討しました。この文言にこだわってとにか
く議論が展開した、というのがわれわれの班でし
た。挙がりました意見は、ペーパーにも書いてあ
りますように、まず教育界全体にわたる弊害とし
て、今まで日本人はこの批判的精神をもたなかっ
たんじゃないか、そうであるならば教育を変えね
ばならない、というものが出ました。さらにはそ
こから、哲学、芸術などを教えていくことが必要
なのではないかというような問題に進んでいきま
して、加えて、じゃあ、日本にはかつてどのよう
なもの、つまり批判的精神につながる文化的な財
産があったのだろうかということで、日本には芸
事のようなものがあって、これが言ってみたら近
代化の中で断絶されていたのではないか。そのよ
うな問題関心から、批判的精神なるものを博物館
でどのように考えていくか、および教育でこれを
つくり上げていくのはどういうことか、というの
が問題になり、さまざまな観点からこの問題を議
論した次第です。

加えて、最後にちょっと問題提起となるのです
が、その地域と博物館がそういった批判的精神に

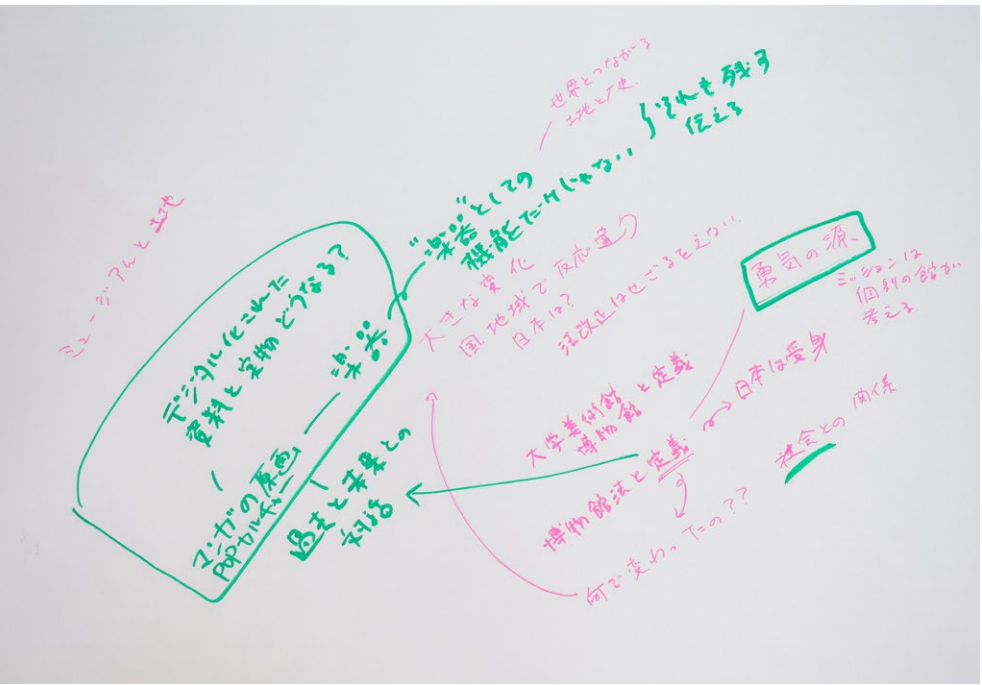
関する問題を提起する場所として機能している例
というのは、一体あるのか否かという問題ですね。
この問いをちょっと考えていくことによって、こ
の問題も深めていけるんじゃないかなというの
も、われわれの意見となります。ありがとうございます。



＜グループ6＞

私たちは定義そのものを語るというよりも、定
義を出発点にしながら、3つぐらいの話題につい
て議論したかなと思います。最初はこの定義を受
けての日本の反応は、世界の中での反応と比較し
てどうなんだろう？という議論になりました。先
ほど、五月女さんから、今、こういう状況です
よってという説明がなされましたが、それに加えて、
それぞれの現場の反応などの話をしました。そこ
からちょっと議論が変わって、ミュージアムが
扱っているもののうち、いったい何を残すか、何
を未来に残していくのかという話になりました。
例えば、デジタル化というのは一体、なんのため
にやっているのか、実物との関係は？とか、ある
いはマンガというメディアの何をどういうふう
に残していくのかというような話も出ましたし、あ
るいは「楽器を残す」ということは、楽器そのも
のを残すことか、それともその機能を残すことな
のか、さらには機能だけではない何かを残してい
くことなのかというような、そういうお話があり
ました。また、こうやって資料について考えるこ
とが、過去と未来との対話という定義の中のテー
マに実は当てはまるんじゃないかっていう話が出
ました。最後に定義とは、それに私たちが縛られ

るものではなくて、むしろ私たちの勇気の源なん
じゃないかと。ただし、それはミッションとは違
うものだ。ミッションはそれぞれの館がやはり
その土地と結び付いてつくっていくものじゃな
いのかという議論になりました。以上です。



(2)－4 第2セッション「みんなで考えた
いこと、私をもっと考えたいこと」

①グループ分け

佐藤：今から第2のセッションを始めます。第2のセッションは午前の部の終了後に書いていた付箋のトピックをもとにグループ分けを行います。先ほど、こちらで6つのグループに分けました。ICOMでの成果をどのように地域に活かしていけるか、まちづくりはどのようにすればいいのか、ひらかれた博物館の「ひらかれた」とは一体どのようなことなのか、コミュニティと本当につながるというのはどういうことか、というような地域の問題についての関心が多くございまして、半分くらいになりました。ここの分類が難しかったのですが、主に人との関係のことで書かれている方、主に地域全体の発展という視点で書かれている方、地域の中でどのようにミュージアムを運営していこうかという方という感じで分けています。おそらくどのグループに入られても、ご関心からそう遠くはならないと思いますので、

今日の出会いをご縁ととらえて議論なさってください。

では、グループ分けを発表します。「博物館の定義について」のコメントをくださった方のグループ。「持続可能性」についてのグループ。持続可能性について書かれている方は植民地主義のことに重なっている方がとても多く、そこをできるだけ関心が近いと思われるように分けさせていただきました。続いて「脱植民地主義」についてのグループ。「地域について、主に人に関する」コメントを書かれた方のグループ。「地域のことで、主に発展」について書かれた方のグループ。「地域でのミュージアムの在り方」について書かれた方のグループ。以上の6グループです。

高尾：関心のメモは一度お返ししますので、これを参考に議論なさってください

20200113

ワークショップ
「ミュージアムの新たな形」 に向けて

ICOMで話題になったことについて

・みんなと話したいこと

・私をもっと考えたいこと

を付箋に書いてください。
付箋には、1つの内容をお書きください（ひとつだけでも可）。

この用紙に付箋を付け、氏名をご記入の上、ご提出ください！

氏名

ワークショップに用いた「関心メモ」

関心メモの結果リスト

第2部ワークショップ「ミュージアムの新たな形」に向けて 事前アンケート(回答全27件)		
	ICOMで話題になったことについて みんなと話したいこと	ICOMで話題になったことについて 私をもっと考えたいこと
1	持続可能性の追求をMuseumでどうすすめていけるか	エンカル消費をいっそう実行し、推進できる、それが市民の「信頼を得る」ようなMuseumづくりや職員と利用者の関係の研究
2	ICOMと国内の温度差・・・。 どのように埋めていくことができるのか？	Museumの社会的な役割とは？
3	日本と植民地の問題（コロナイゼーション）。 日本にいと、あまり意識されない？できない？	ミュージアム、公共文化施設のSDGs・・・
4	「これからのミュージアムがどうあるべきか」 ex. ・神殿からフォーラムへ、開かれた交流の場 ・地域コミュニティ、社会の結節点として ・文化・産業の保護・育成・推進	「各地の様々なミュージアムの連携促進・推進の方法」 情報交換や勉強会、コラボレーション企画など、つながりを育成する場について、考えてみたいです。
5	新（案）、現行定義とも営利は追求しないこととされているが、 施設設備、維持管理とも行政負担は〇もしくはプラスにと言われている	これからの博物館の姿。体験はどこまで許容されるのか、イミテーションではなく、本物に触れる機会には必要。
6	「持続可能な未来の共創」について ・具体的に博物館・美術館はこの点について、どんなアクションを今後起こしていくのか？具体例などを示しつつご教示頂ければありがたい。	「デコロナイゼーションと返還」に関連して この課題は、国内における文化財行政においても類似した構図を持つと思う課題がある。「国立館・国立大博の所蔵資料」と地元館・地元地域との関係性を今後どう理解・対応するか？
7	ICOMの博物館定義の変更（将来的）に伴い、日本の博物館法における定義とその役割をどうマネジメントするか	昨年の法改正によって、博物館の所管も首長部局へ移ることが可能となりましたが、それに対応して、何か（定義と併せての）議論を博物館関係者だけでなく広く社会と準備していく（議論していく）ことにはどんなことがあるか、その事例など。
8	ICOMがあったことを、各自の現場でどう活かすか	「ミュージアムの新しい形」は、どんなのが良いんだろう（みんなの考えも聞きたい）
9	これからの国内の博物館のあり方について	ICOM京都大会で語られたことと国内の博物館（界）で語られていることとのすり合わせ（理解を深めること）
10	ミュージアムが「開かれている」とはどのような状態か改めて考えたい	ミュージアムと産業、文化と産業の理想的な関係とは
11		デジタル化された原資料の活用について
12	博物館での真面目でない人権教育	
13	博物館における持続可能性について具体的にどんなことができるか？	美術館の社会正義。ICOMの定義の中で気になってる言葉なので。
14	SDGsってどうしたらいいんだろう？	で、結局博物館って・・・
15	博物館は地域（の人々）を元気にできるのか。地域づくりできるのか。	博物館が行う地域の持続可能性の獲得
16	博物館と地域コミュニティの連携。博物館は、地域にある文化財または資料（歴史、民俗、自然など）を守るため、地域コミュニティの人々とどのように関わり、または地域コミュニティの人々をどこまで、どのようにサポートしていけば良いか。	
17	ICOMを通じ、博物館と市民（来館者）の関係。 運営＝開館時間、内容、企画、料金など。	災害と博物館。 1月10日河野俊行さん（イコモス会長）に寄稿いただきました。京都新聞サイトで読めます
18	職場での人材育成はうまくいっているか。うまくいっているところは、どのような努力、工夫をしているか	博物館、美術館で働いている皆様への「マンガ・まんが・漫画・MANGA」文化の紹介：特に資料保存の現場から発信。もしかすると日本人が思っている（感じている）以上に外国の人たちの方がマンガの存在価値をわかっているかもしれないと日々感じているので。
19	博物館はどのような「場所」になっていくべき？	博物館をもっと良くするためにできること
20	持続可能性	地域とのつながり、まちづくり
21	”博物館で社会教育をする” 一般市民レベルで美術館、博物館が社会問題について考える場所であるという認識がない。美術教育が学校で徹底されていない以上、ミュージアムがどのようにそこを補うか。	
22	「博物館と地域発展」 博物館は常に地域との関係の中で生まれ変化してきている。今、地域×博物館で考えるとすると、何が焦点となるか。面白い動き、事例、可能性など。	
23	こういった大会や、報告会に参加した後、自館に戻ってどの様に共有しているのか、もしくは、していないのか	自分が働いている地域、生きている時代の中で博物館の使命をどう人々へ還元できるか
24	博物館と地域発展	指定管理者制度と文化的公共性
25	社会貢献のあり方とは？	自治体の担当部局者の理解をUPするには？
26	日本にとっての脱植民地化	ICOMとOECDのガイドラインと日本のミュージアム
27	温度差をどう埋めるのか。 たとえば、 ICOM ≠ 日本の博物館 また、日本の博物館の中でも 大都市にある館、大規模館 ≠ 地方都市にある館、中央の組織とつながりの薄い館	誰のための、誰による、何のための？、何の持続可能か。 地方の博物館は収蔵庫問題や建築老朽化問題に苦しんでいて、それもある意味では「持続可能」に結びつくことなんだけど・・・。

54

55

②グループ発表
＜グループ 地域と人＞

こちらの班では「地域と人」がテーマになりました。地域の捉え方は多様で、博物館はその多様な地域を支えていかなければなりません、逆にそういう地域を支えている博物館も支えていかなければいけない。そのためには、他の博物館だけではなく、国やメディアを巻き込んで、地域を支える博物館を後ろからサポートしていかなければ



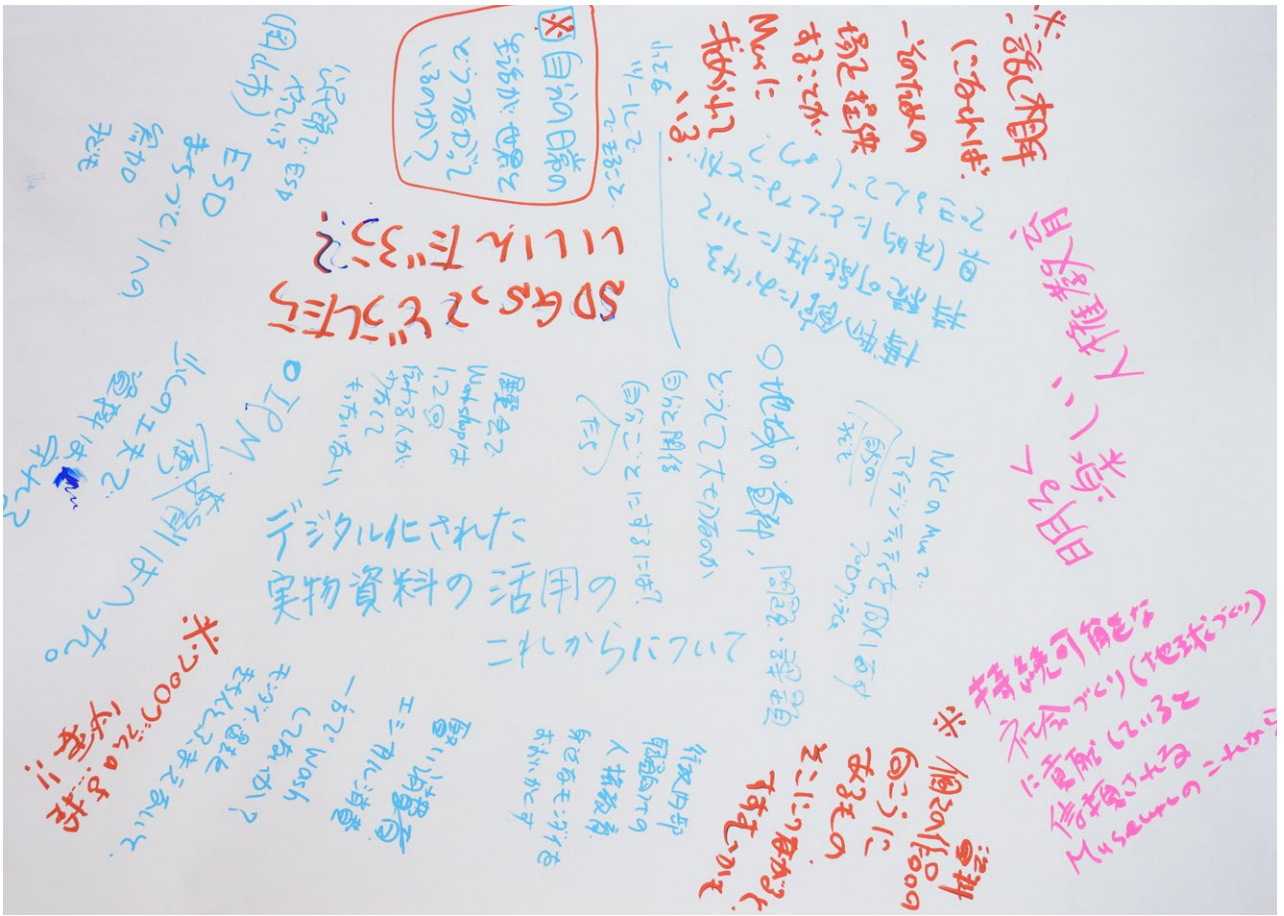
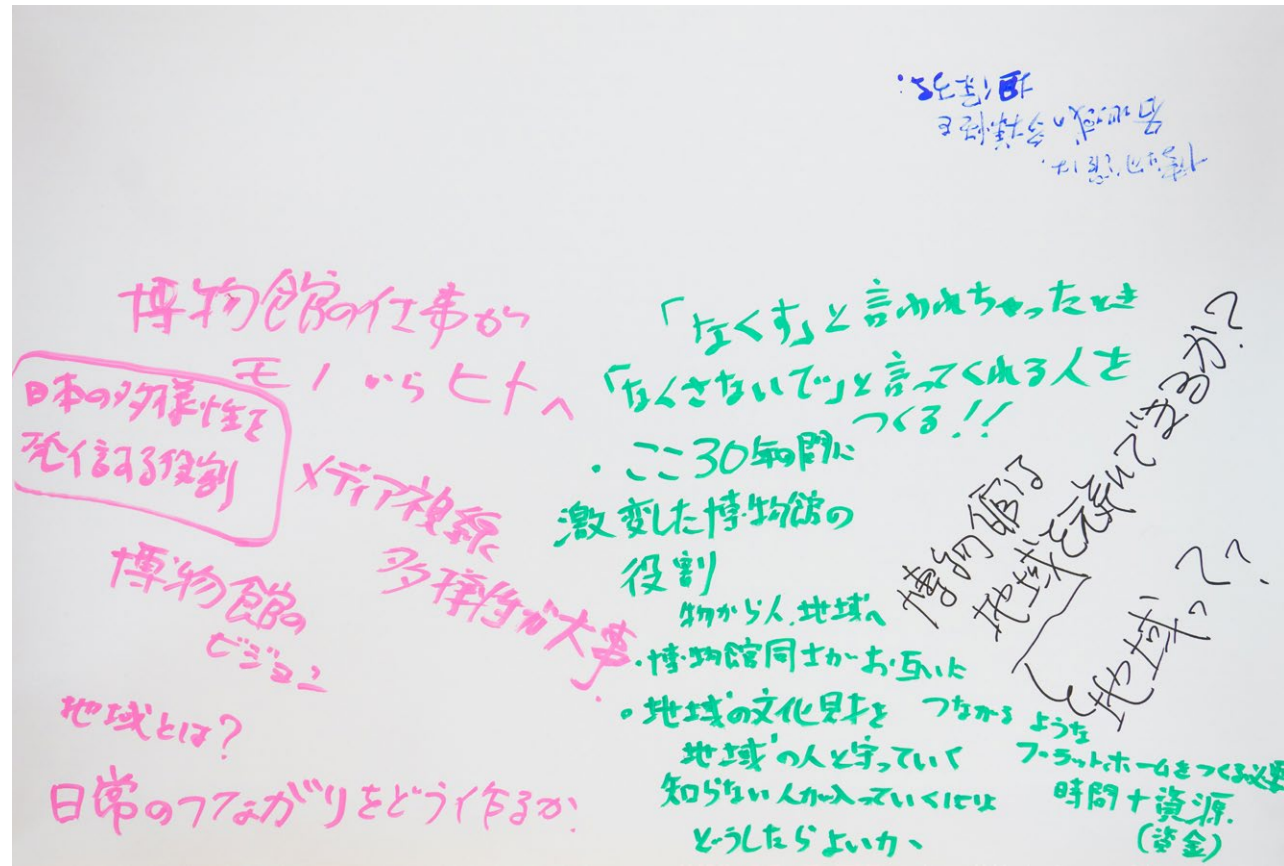
ならないという意見が出ました。さらに、地域の人が「博物館は本当に必要だよ、なくさないでほしい」と言ってくれるように、地域の人とつながりを持ち、地域の中で博物館が必要だっていうことを訴えていくことが大切であるという話が出ました。以上です。



＜グループ 持続可能性＞

こんにちは。こちらは持続可能性ということで話をしました。国連の持続可能な開発目標、SDGsに対応するため、博物館は一体どうしたらいいのだろう、という話をしました。SDGsは、2015年に国連で開かれたサミットで決められた国際社会共通の目標です。貧困をなくす、飢餓をゼロにする、質の高い教育をみんなに、といった17個の目標とこの目標達成のための169の具体的目標、ターゲットで構成されています。すごくたくさんの目標があります。これを結局、博物館でどうしようかと考えました。その結果、博物館がこうした課題について、話すことのできる場である事、また、収蔵する個々の史料や作品の向こうにある「何か」とうまく繋がると前に進めるのではないか、という意見が出ました。さらに、博物館がこの目標や課題を自分事として、どう捉える事ができるのか、自分の日常と世界がどうつな

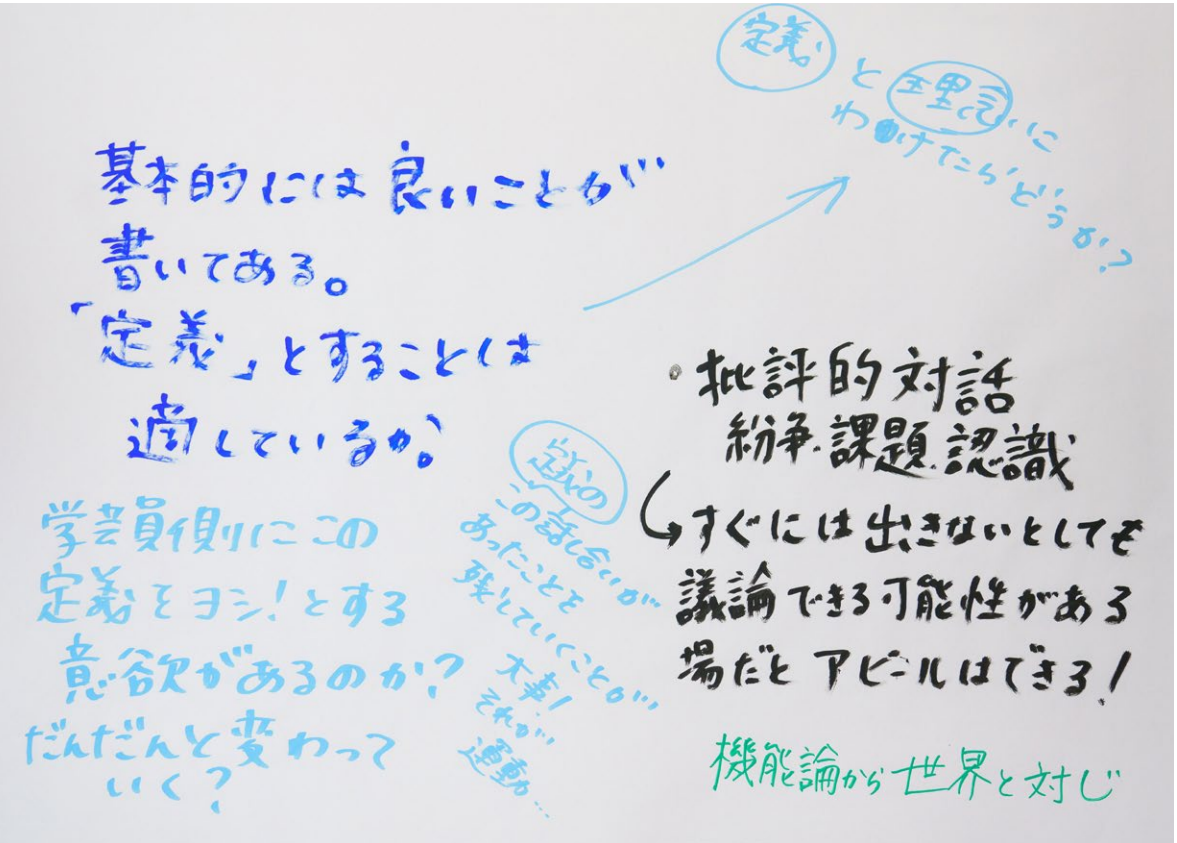
がっているのか、そういうような視点で展示やプログラムができるといいのではないかと。そして、それが一過性のやりっ放しとか、良かった良かったとマンネリ化してしまう事は駄目なので、プログラムの点検も必要だということで時間切れとなりました。



<グループ 博物館の定義>

誰が話すかは最後までめめましたけれども、私のほうでさせていただきます。いろんなことを話したのであんまりまとまりがなかったというのが本当のところなんですけれども、いくつかまとめますと、基本的にはやっぱりええこと書いてあるんじゃないかというのが一番あって、それが定義として適しているかどうかというのがやっぱり問題やないかということで、例えば、これはどういうふうに最終的に落ち着くか分からへんけれども、（定義案の条文が2段落に分かれていて、その1段落目を上、2段落目を下とすると）下の部分を定義として、上のほうを理念という形であつたら多くの人は納得できるんじゃないかという話も出ました。また、これは翻訳の問題なんですけれども、conflictを紛争とか、criticalは批評的とか、日本語に直すときにだいぶきつくなっているところがあって、例えば conflictであれば、役所の人間はすぐそんなもん日本に関係ないのにとかいうふうになってしまうけど、それを例えば「軋轢」というふうに訳せば、すんなり受けられる部分も

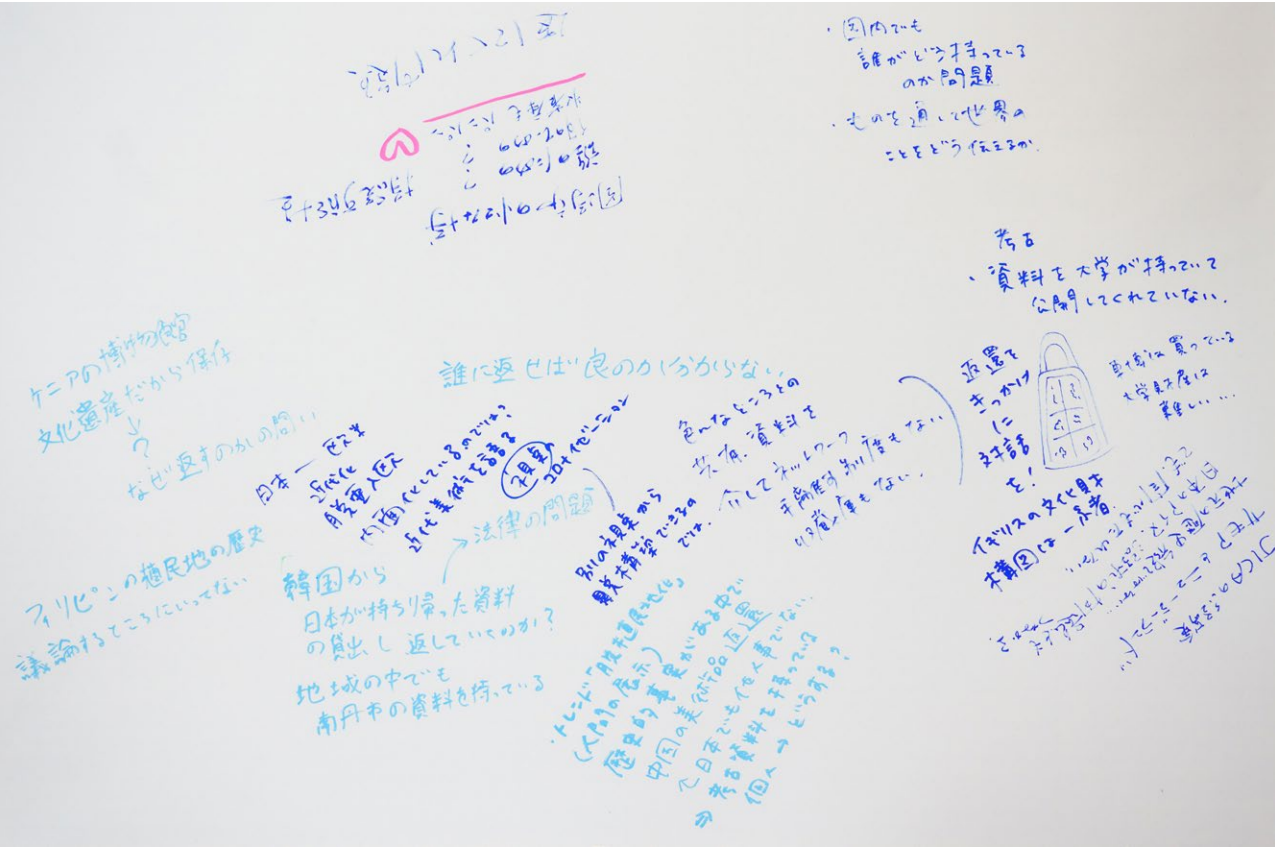
あるのではないかと。また、先ほど定義とするのは問題やと言いましたけど、まあ、定義っていうのはちょっとしんどいかもしれないけど、こういうことを出していくことによって私たちは運動する1つの場をもてること、また、この話し合いが京都大会にあったということが大切で、それを運動としてつなげていくというのが大切ではないかという話も出ました。



<グループ 脱植民地主義>

色々な方向に書いてあるので分かりにくいかもしれませんが、私たちはミュージアムと脱植民地主義の問題、デコロナイゼーションの問題について話し合いました。各々の経験から話し合ったのですが、例えば考古の分野では資料を大学が持っている、一緒に発掘したのに博物館に貸してくれないという問題があったり、太平洋地域の博物館では現在でも旧宗主国に支配されているような記述があったりということです。また、歴史博物館ですと韓国から日本が持ち帰った資料のなかで、返還して欲しいという資料が出てきています。美術の世界でもやはり欧米の価値基準を美術史として受容しており、それを私たちが内面化しているのではないかなという声もありました。様々な問題がありますが、意外とデコロナイゼーションの問題は、日本でも結構、身近にあるのではないかと。例えば、海外にある資料の返還問題では、その返

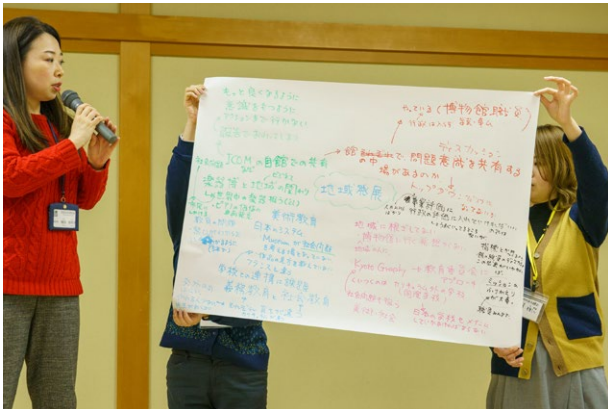
還をきっかけに諸機関および海外とも対話を始める機会になるのではないかなという話になりました。というのも、近年多くの博物館が抱える問題として、収蔵庫には空きがないですよね。なので、様々な機関でその資料をどのように一緒に有効活用していくか考えることがこれから大切になるのではないかと考えました。



<グループ 地域発展>

私の班は地域発展についての班だったのですが、大体、話したのは、学校教育とミュージアムとの連携と、各館内でICOMなどで話題になった問題に関する意識の共有化がはかられているかどうかということについてでした。学校教育との連携については、美術教育の話から作品の見方を教えることや学校との連携がまだまだ課題なのではないかという話になり、そこから義務教育と社会教育はカリキュラムの成り立ち方が違うために乖離がもたらかったのではないかという話ができました。また、このようなICOMなどのワークショップで得た成果を、終わった後に、館に戻って自館内で共有をどのようにしているかということについてですが、館の中で問題意識を共有する場があるのかどうかという話から、各館では事業

評価、行政の評価が来館者を増やすことばかりになっているのですが、そういった行政の指標などに館の職員のディスカッションの成果が活かされていければいいのというような話で終わりました。以上です。



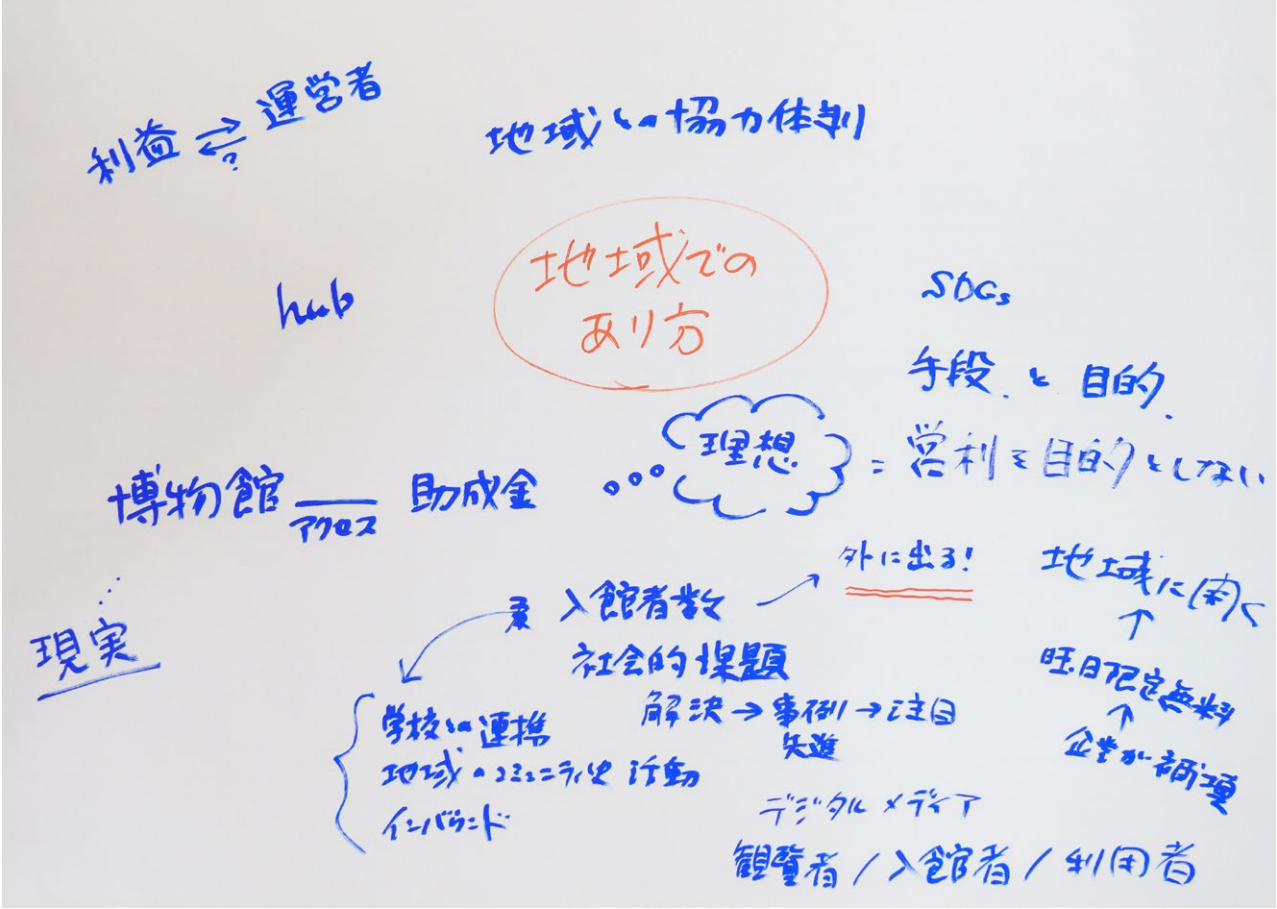
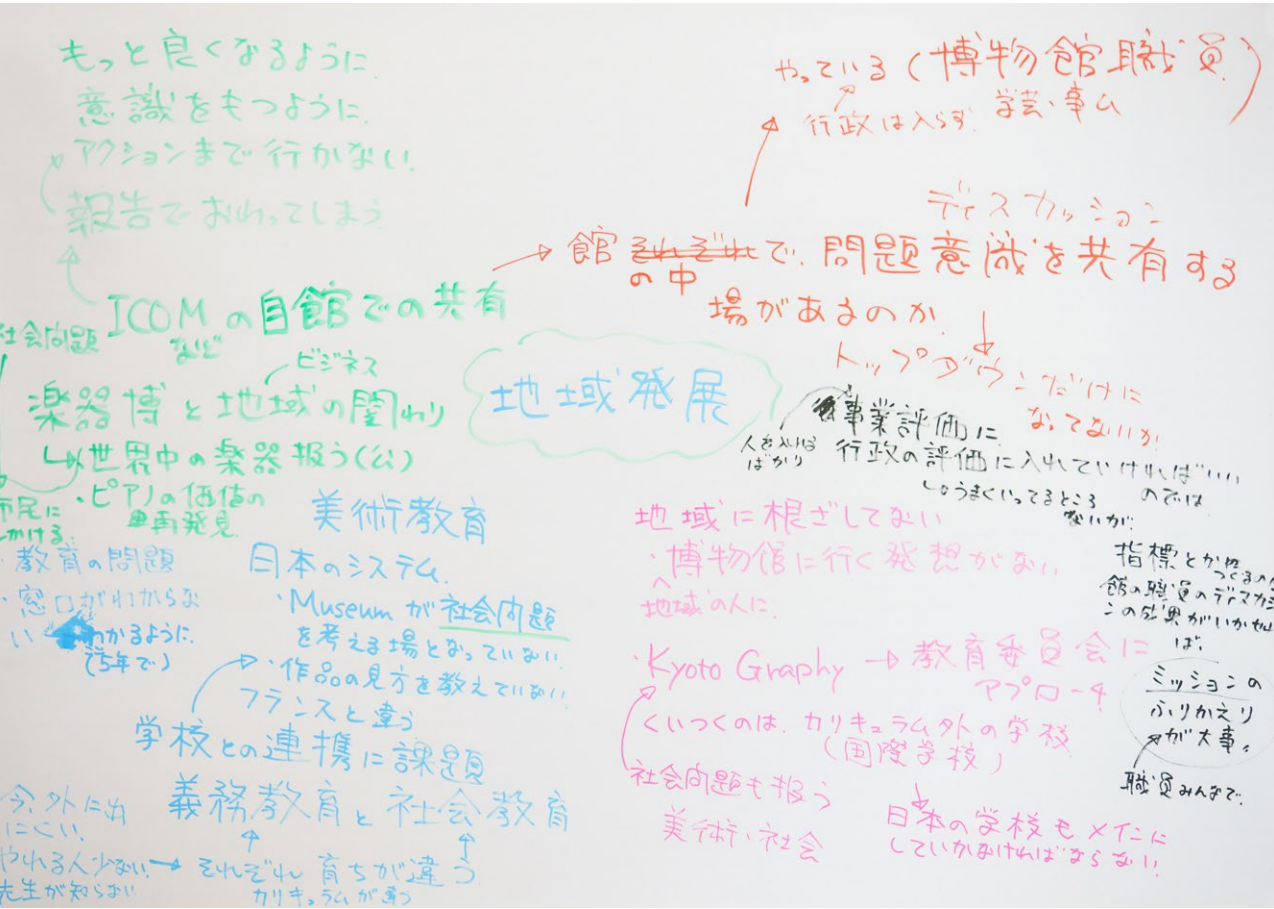
<グループ 地域でのミュージアムのあり方>

私どもは地域でのミュージアムのあり方について考えた次第なのですが、ああこうだ言う前に、現実的には資金の問題があるということになりまして…。その問題になったときには、一番分かりやすいのは入館者数でありまして、これを増やすためにどうしたらいいんだろうかという問題、そのためのいろいろな手段をバンバン言うていくような話し合いを私どもの班では行いました。例えば学校との連携を深めるというような例もあるだろう、とか、現在はインバウンドですごい成果をあげている館もあります。他に地域のコミュニティー活動の中でそういった事例を増やしているとかですね。また、地域の問題を解決することで地域、さらには日本でも他にない先駆的な博物館事例になっていき、そうした事例を持つからこそ、外から関心をもって館に来てくれるようになる例もあるでしょう。このような事例を多く学んでいくことで、入館者数の問題は、何とか解決していけるのではないかな。そのようなことを話し

合っていました。ただ、結局、この地点から営利を目的としないという、博物館の目的をどう考えたらいいのかという議論になりまして、皆さんにもぜひ、この問題を考えていただきたいと思います。ながら、私どもの議論は終了した次第です。ありがとうございました。



高尾：ありがとうございます。みなさんの関心ごとがスタートになったのかなと思います。また議論の場をこれから一緒につくりましょう！ということに関心ごとのセッションを終わりにします。ティーブレイクの後には、隣の部屋に集まってください。





ワークショップ開始前



ワークショップ開始前



ワークショップ開始前



第2セッションのグループ分け

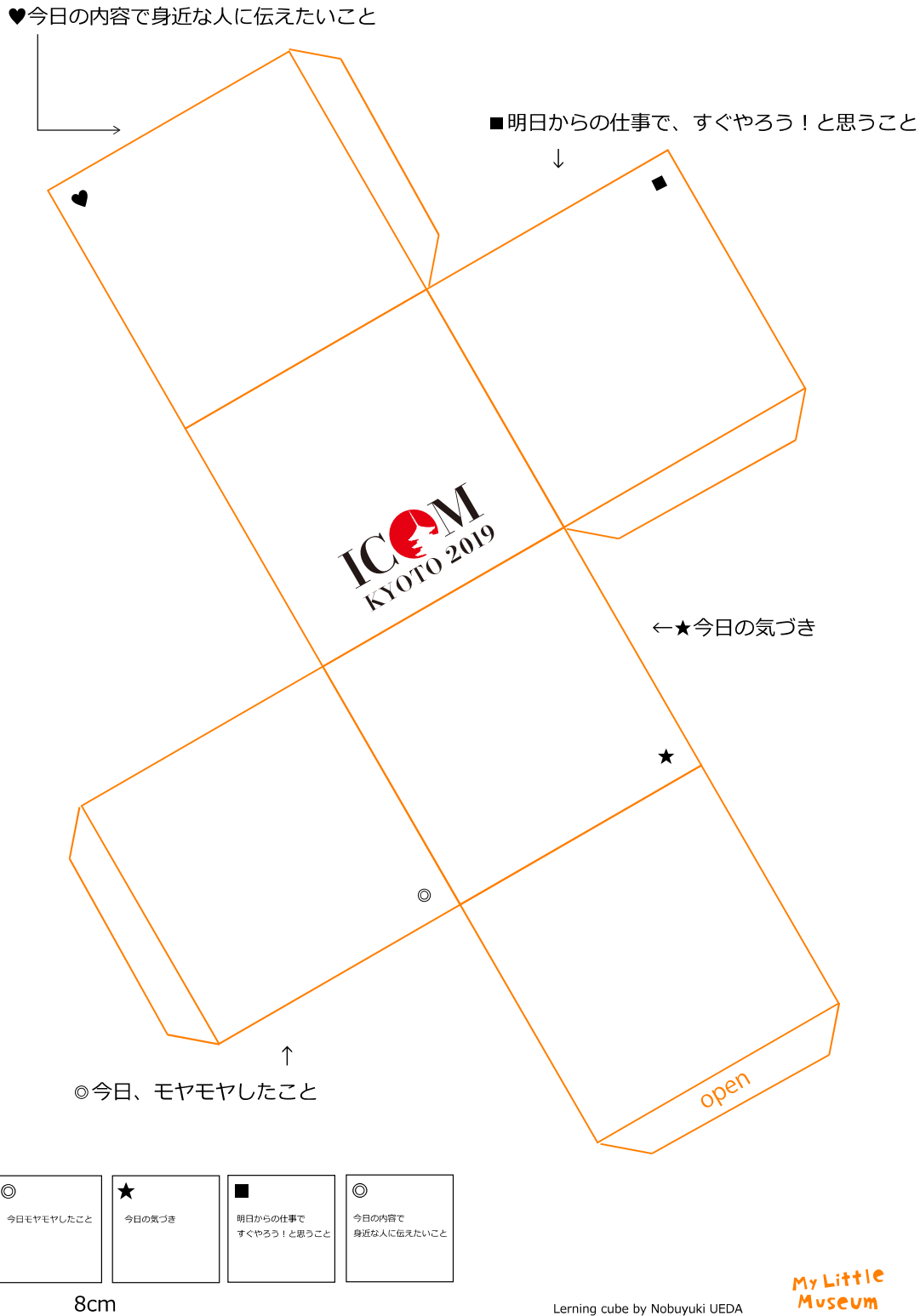


セッション間の移動

(2) - 5 第3セッション「自分と向き合う」

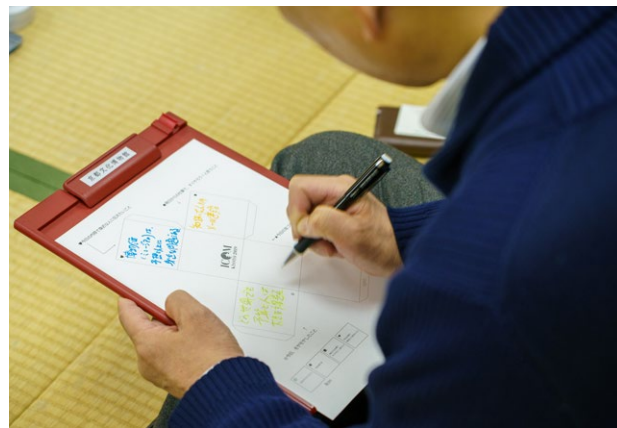
①キューブの作成

佐藤: クリップボードに展開図が描かれた白い紙がはさまれています。一人1つ使えるように座ってください。
文房具は同じ島の人と共有してください。



佐藤：今日、3つめのセッションです。ここではみんなで話をする前に、まずご自身の今日1日を振り返ります。

こちらの白い紙、切って組み立てると立方体（キューブ）になります。振り返りを短い言葉にして6つの面にかきます。まず、5つの面についてかきます。◎は「今日モヤモヤしたこと」です。いっぱい話したら、むしろモヤモヤしてしまったということをかいてください。★は「今日の気づき」です。■は「明日からの仕事ですぐやろう！と思うこと」、♡は「今日の内容で身近な人に伝えたいこと」です。ICOM のロゴの面には、ICOM をお願いしたいこと、ICOM で自分がやりたいこと、ICOM を通して考えたいことなど「ICOM とのつながりでのこと」をかいてください。切って組み立てるとキューブになります。open とかかかっているところを貼らずに残しておくとう白い面が上にきます。そこまで作って活動してから最後の1面をかきますので、開けた状態で組み立ててください。カラーペンなど置いてありますので、楽しくかいてください。できたものを使ってやりとりをします。



佐藤：どんなふうにかくのかの1例として、わたしがいたものから1面だけ紹介します。「身近な人に伝えたいこと」として「このまちで議論を始めない？」とかきました。こういうところで集まるとすごく盛り上がるけど、日常に帰るとこれが夢の世界だったかのようになり、現実と繋がらないということがよくあると思うのですが、ここに来なかった人や今関心がない人とどう共有していけるかを考えると、まとめを伝えるより一緒に話す場を作っていくといいかなと思ったのでこうかきました。



キューブができれば、写真を撮ります。その後、キューブを使ってコミュニケーションをします。

②キューブの共有

佐藤：出来上がったら、後ろの白いコーナーで写真を撮ります。撮ってもらった方は、この辺りに集まってください。2～3人でご自身のキューブを見せ合って、書いたことを紹介し合ってください。作る、写真を撮る、話す、という流れです。



高尾：まだお話ししたことがない人と是非話してください。

佐藤：5つの面の振り返りを経て、周囲の方とお話をしたことで、今日という日に自分がどのような気づきを得たのかということがなんとなく見えてきたのではないかと思います。残しておいた1面には、今日はこれを学んだとか、このことを考えていきたいという「今日の経験の中で一番持ち帰りたいこと」をご記入ください。それがかけたら、こちらに集まり、最後の1面を写真に撮って、隣の部屋に移動します。

(2) - 6 秘密の第4の間「エピローグ」

佐藤：はい、最後の部屋です。最後の部屋にソロリと入って、キューブを舞台に置いて、ご着席ください。

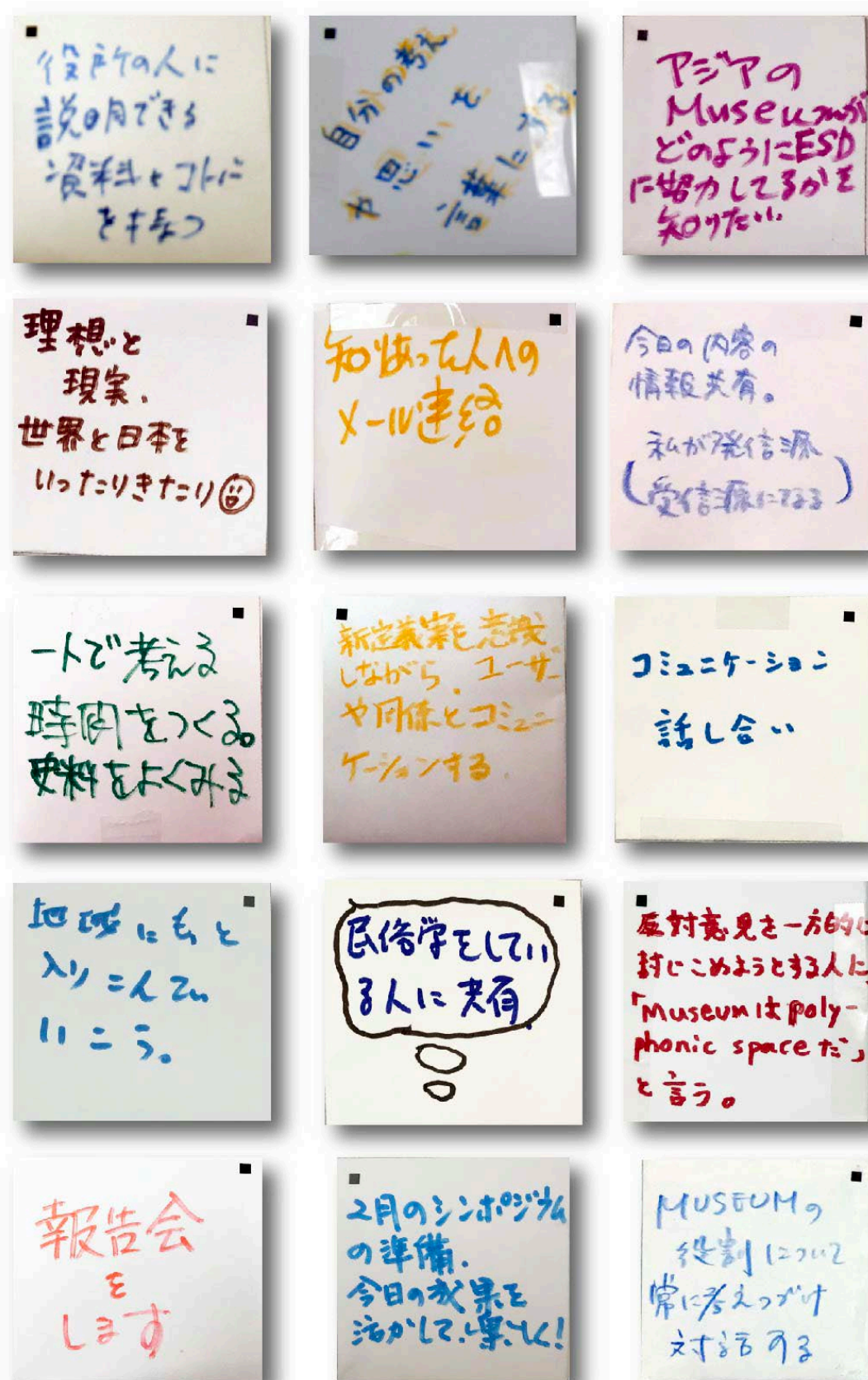


③まとめ

佐藤：舞台にキューブが並んでいますが、このような部屋があったこと、舞台があったことでキューブの作品感が増したように思われます。今日の経験が、わたしたちが時間と場を共有することで作り上げた作品としてこの風景の中に納っているという印象です。本日のプログラムはこれで終わりです。経験をキューブと一緒に持ち帰ってください。この中に今日の気持ちが集約されていて、明日からすぐやることまでかいてあるので、帰ったら始めていただければと思います。できればキューブを仕事の机に置いて、ときおり思い出してください。

関谷：みなさん、本日は長い間お疲れさまでした。ありがとうございました。ICOM 京都大会、いろいろなテーマがあり、取っつきにくいことや、わからないこともあったとは思いますが、今日を出発点として今後自分の中で考えを深めていくきっかけになればと思っています。われわれのほうでもできるだけサポートして、今日参加された方だけでなく、幅広くミュージアム関係者に広げていけたらと考えております。これからはサポートをよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。この会議を開いてくださった京都文化博物館さんとファシリテーターのお二方にあたたかい拍手をお願いします。





明日からの仕事で、すぐやろう！と思うこと (1)



明日からの仕事で、すぐやろう！と思うこと (2)

5. 付録

(1) 報告会配布資料「ICOM 京都大会主要プログラム概要（暫定版）」 (ICOM 京都大会準備室作成 2020 年 1 月 13 日)

1 基調講演

(1) 隈研吾「森の時代」

隈氏は、現代の建築は、自然との繋がりが断ち切られたコンクリートの時代から、自然と調和する森の時代へと移行したと主張する。

そのため、隈氏は、環境や地域との「繋がり」を重視してミュージアムを設計していると言う。具体的には、①リビングルームのように、リラックスして人々が交流できるコミュニティの場、②実物を有し、学校教育とは異なる役割を果たす教育の場、③地元の職人や材料等を通した地域経済との結びつきの場、の視点がミュージアムには不可欠だとした。

講演では、それらの事例として、隈氏が設計した世界各地のミュージアムが紹介された。日本・栃木県の広重美術館では、地元の木材や紙、石等を使用することで地元の人々の参加意識の醸成が心掛けられ、中国・杭州の中国美术学院民芸博物館では、地元の瓦職人による瓦を活用された。また、フランス・マルセイユの現代美術センターでは、地元のリサイクルガラスが外壁の材料に取り入れられ、環境負荷の軽減と地元経済の活性化の両立を果たしている。その他、ブラジル・サンパウロのジャパンハウスでは、日本の伝統工芸とブラジルの若者のデザインを組み合わせ設計された。さらに、英国・スコットランドにあるヴィクトリア・アンド・アルバート博物館のダンディ分館は、ダンディの誇る崖を外観のデザインに取り入れ、内部にはコワーキング・スペースが設けられ、地域との繋がりと新たな人の流れを創出している。そして、2020 年東京オリンピックの会場である新国立競技場は、小川や遊歩道の整備等、「繋がる」存在であることが心掛けられた。この基調講演を通じて、ミュージアムは、森のように人々に開かれ、受け入れる存在として、地域の文化や自然と繋がり、社会的役割を果たす場になりうるという視点が参加者に示された。

(2) セバスチャン・サルガド「アマゾン熱帯雨林保護—ブラジリアン・イニシアティブ—」

サルガド氏の講演は、アマゾンの現状についての解説に始まり、次いで熱帯雨林や先住民を写すサルガド氏の作品を音楽と共にスライドショーで紹介、最後に質疑応答という構成であった。

まず初めは、現在進行形で進む大規模な開墾によるアマゾンの森林破壊について、アマゾンの森林の 19% がすでに破壊されたという客観的な数値による説明から始まった。サルガド氏は、残りの 81% を守るためには、法律の整備だけではなく、人々の関心が非常に重要だと主張し、さらに、保護活動の主体者たりうる先住民の存在の重要性を指摘した。サルガド氏によると、アマゾンには 130 言語、165 部族、合計 30 万人に上る先住民族が暮らしているが、西洋からもたらされた疫病により 500 年前の 4 - 500 万人から激減したとのことだ。しかも、彼らの健康管理を行う団体への政府からの予算は削減されており、サルガド氏は、森

明日からの仕事で、すぐやろう！と思うこと (3)



林だけではなく先住民自身も守っていく必要があると考えている。

そこで、サルガド氏は、アマゾンの自然や先住民の撮影によりアマゾン全域をカバーするアーカイブを構築し、これらを通して、アマゾンに対する人々の関心を高めることを目指しているという。また、写真は、書籍の出版や展示会の開催により公表される予定で、このような活動がアマゾンの熱帯雨林や先住民を保護する必要性の理解につながり、さらなる被害を生むことなく天然及び人的資源の活用を可能にする新たな方法が生み出されるきっかけとなることを目指しているとのことであった。

最後の質疑応答では、博物館の専門家が社会の変化にどのように貢献できるか、参加者と議論があり、サルガド氏は、ミュージアムはアマゾンの現状を伝え、人々に行動を起こしてもらうためにも重要な存在であり、より人々に開かれた存在でなくてはならない、と主張した。

(3) 蔡國強「私の美術館春秋—ミュージアムあれこれ考」

蔡氏の基調講演は、この日のために編集されたビデオで幕を上げた。ビデオでは、蔡氏の展覧会が紹介され、その後、蔡氏の登場となった。蔡氏からは、これまで展覧会等を通して関わってきたミュージアムについての私見が述べられた。

蔡氏がこれまで実施してきたプロジェクトには、兵馬俑と現代アートを組み合わせたメルボルンのビクトリア美術館の「兵馬俑と蔡国強展 (Terracotta Warriors & Cai Guo-Qiang)」やニューヨークのグッゲンハイム美術館で企画した展覧会「Non-brand 非品牌」等、大規模なプロジェクトがある。さらに、モスクワのプーシキン美術館、マドリードのプラド美術館、フィレンツェのウフィツィ美術館、ナポリの国立考古学博物館や日本国内では、横浜美術館や世田谷美術館等で行ってきた数々の個展でもミュージアムと関わってきた。

その中で、ラストカーニバルと名付けられた展示では、プラド美術館にあるルーベンスの絵がヒントとなり構成が考えられたという自らの経験に触れ、インスピレーションを与えるミュージアム体験を提供することが、蔡氏の考えるミュージアムの役割の一つだと述べた。さらに、福島県いわき市で行った「なんでも美術館 (Everything is Museum)」と名付けた一連のプロジェクトにおいて、地元コミュニティとともにミュージアムの建設が困難な地域で住民と行ったアート・プロジェクトの経験が紹介され、近年注目されているミュージアムの観光地としての経済的価値だけでなく、地域住民にとってのミュージアムの重要性を主張していた。

講演において蔡氏は、作品を通して、人々が時代や国を超え、ローカルとグローバル、伝統と未来という二項対立の垣根を乗り越えていく重要性を示しており、ミュージアムの今後の可能性や役割について提示されていた。

2 プレナリー・セッション

(1) 博物館による持続可能な未来の共創

モデレーター：Morien REES ICOM 持続可能性ワーキンググループ (WGS) 委員長

スピーカー：Bonita Alison BENNETT ディストリクト・シックス博物館 館長

Yacy-Ara FRONER ミナス・ジェライス連邦大学 美術学部教授

Cecilia LAM 競馬会気候変動博物館 館長、香港中文大学 事務局長

Henry MCGHIE Curating Tomorrow 創設者

Sarah SUTTON Sustainable Museums 代表／ We Are Still In 実行委員会 委員

毛利 衛 日本科学未来館 館長

ICOM では国際連合の持続可能な開発目標 (SDGs) に対応すべく、2018 年に Morien Rees 氏をリーダーとして、ミュージアム・セクターの目標設定を目指すワーキンググループが設置された。本プレナリー・セッションはその一部に位置づけられている。

まず初めに、日本科学未来館館長の毛利衛氏からは、2017 年の世界科学センターサミットにて、SDGs の達成を目指す東京プロトコル及び、ミュージアムが人々のつながりを通じた人類の持続可能性に貢献できる可能性を秘めていることが示された。続いて、気候変動に関する非政府組織の代表等を務める Sarah Sutton 氏は、ミュージアムの SDGs 達成における他の組織とのパートナーシップの重要性を指摘。また、彼女は米国政府にパリ協定への参加を促すミュージアムを含む非政府組織同盟である We Are Still In のメンバーでもあり、ミュージアムは世界を変える力を持っていると説いた。次に、世界初の気候変動の専門ミュージアムである香港・競馬会気候変動博物館 Cecilia Lam 館長は、展示及びコミュニティと協働した事業により、人々の気候変動に対する行動を変えるべく活動していることを紹介。そして、南アフリカのディストリクト・シックス博物館 Bonita Alison Bennet 館長からは、アパルトヘイト人種隔離政策以後の南アフリカにおける強制収容の歴史展示を事例として、ミュージアムが人権問題について発信することが、人々の不平等の改善、健康、幸福など様々な SDGs の達成を目指すことにつながるという別視点が提示された。その後、文化遺産分野の専門家である Yacy-Ara Froner 教授は、ミュージアムが気候変動等の社会的問題を教育する場であるためには、ミュージアム自身が自覚的に持続可能性を高める行動を起こす必要があることを強調。最後にまとめとして、Henry McGhie 氏よりそれぞれの開発目標はつながっており、ミュージアムはそれぞれの実態に合わせて、主体的にあるいは教育や支援等により目標達成に向けた行動を起こすべきだとの発言があった。

(2) ICOM 博物館定義の再考

モデレーター：Jette SANDAHL 博物館の定義・展望・可能性委員会 (MDPP) 委員長

スピーカー：George Okello ABUNGU Okello Abungu 世界遺産コンサルタント CEO

Margaret ANDERSON メルボルン旧財務省ビル博物館 館長

Lauran BONILLA-MERCHAV コスタリカ大学 教授 ICOM コスタリカ委員長

Shose KESSI ケープタウン大学 心理学部准教授

W. Richard WEST Jr. アメリカンウエスト・オートリー博物館 館長

Nirmal KISHNANI シンガポール国立大学 設計・環境学部

ICOM では、2017 年に博物館の定義・展望・可能性委員会（MDPP）を特別委員会として立ち上げ、博物館の定義を再検討してきた。委員会では、2018 年の意見募集とその定義への取り込みを経て、2019 年に 5 つの定義案を執行役員会に提案し、そこで一つに絞られた。その案が新たな博物館定義案として、京都大会中の臨時総会で決議されることとなった。

本セッションでは、定義の詳細ではなく、ミュージアムの未来について、社会的・環境的・認識論的な議論が行われた。まず、MDPP 委員長の Jette Sandahl 氏からは、社会的・環境的問題の解決にミュージアムの貢献は必須であり、定義改定の必要性が主張された。続いて、ICOM アメリカの Richard West Jr. 氏が、1990 年代以降、「神殿」から「フォーラム」へと役割が変化したミュージアムの歴史的背景から、21 世紀におけるミュージアムの社会的役割の変化を紹介し、シンガポール国立大学の Nirmal Kishnani 氏は、インド・ムンバイの緑化建築、韓国・ソウルの高速道路撤去による川辺の環境の改善等の事例から、格差問題や気候変動等の社会問題への対応の必要性を示した。また、元ケニア国立博物館館長の George Abungu 氏は、主に植民地主義との関係から、主張が中立とは言えないミュージアムだからこそ、平和に必要な不可欠な人々の相互理解に貢献できると主張。さらに、Shose Kessi 氏からは、南アフリカで起こった偉人の像が脱植民地化の流れの中で人々に撤去される現象を事例に、パブリック・アートには社会的なメッセージ性があり、撤去された像がミュージアムに収蔵されている事実から、議論の場としてのミュージアムの役割が示された。そして、メルボルン旧財務省ビル博物館館長の Margaret Anderson 氏は、包摂の視点から、一方向からの展示解説が困難であるミュージアムにおいては、複数の比較対象を示すことが重要だと指摘し、最後に、Lauran Bonilla-Merchav 氏が、現代社会の重要課題の議論の場であるミュージアムは、時代とともにその定義も変えていくべきだと意見を述べた。

その後、国際委員会等の代表者が登壇し、ICOM 定義の改定にはさらなる議論が必要だと、採決の延期を主張し、実際、9 月 7 日の臨時総会では、採決延期が可決された。

（3）被災時の博物館—文化遺産の保存に向けた備えと効果的な対応

モデレーター：Corine WEGENER ICOM 災害リスク管理委員会（DRMC）委員長

スピーカー：Alejandra PEÑA GUTIÉRREZ プエルトリコポンセ美術館 館長

小野 裕一 東北大学 教授

Aparna TANDON 文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）

Renata VIEIRA DA MOTTA ICOM ブラジル委員長

本セッションでは、博物館防災特別委員会の委員長である Corine Wegener 氏のモデレートにより、まず、ICOM ブラジル委員長の Renata Vieira da Motta 氏が登壇し、リオデジャネイロのブラジル国立博物館の火災について報告した。2018 年に発生した火災は、通常運営の中で、地下の空調の電気系統の故障により発生している人災であり、災害発生時の対策や適切な管理体制の必要性が明確になった。復興は、がれきの撤去と収蔵品の修復を 3 か年計画で進めているが、45%の収蔵品は消失したため、今後はその調査を進め、復興活動をしていきたいとの決意が伝えられた。

続いて、プエルトルコ・ポンセ美術館館長の Alejandra Peña Gutiérrez 氏からは、2017 年のハリケーンによる被災後の美術館の対応について報告があった。美術館は、災害対策がよく計画されていたが、実際

の大規模な災害後には情報の入手手段等、想定外のことも多かった。そのため、普段の準備の重要性が訴えられた。美術館再開後は、無料のワークショップや仮設の収蔵庫設置による他のミュージアムの待避所としての機能等の充実を図ったことが報告された。

文化財保存修復研究国際センターの Aparna Tandon 氏は、大規模災害の頻度が増加傾向にあるにもかかわらず、ミュージアムが地域や国の災害対策のシステムに組み込まれていないことを問題視している。そこで、ミュージアムのレジリエンス（回復力）向上のため、ICOM などのネットワークによるトレーニング、専門家向けのガイドラインの策定、アプリやマッピングツール等を活用した災害対策の共有等の国際センターの取り組みが紹介された。

東北大学の小野裕一氏からは、2015 年に国連で決議された世界津波デーと、それに伴う世界津波ミュージアム会議の概要と意義について説明があった。合わせて、日本全国で広がる、被災した文化財の救出ネットワークが紹介され、最後に、ICOM や UNESCO との連携による世界防災フォーラムの開催が告知された。ディスカッションでは、他の組織との連携の重要性や、ミュージアムの地域の防災への貢献等、地域における災害時や防災におけるミュージアムの可能性が明確になった。

（4）世界のアジア美術とミュージアム

モデレーター：Yukio LIPPIT ハーバード大学 教授

スピーカー：Min-Jung KIM 応用美術科学博物館 学芸員

河合 正朝 千葉市美術館 館長

Christoph LIND ライス・エンゲルホルン博物館 ICOM ICFA 委員長

Anne Nishimura MORSE ボストン美術館 日本美術シニア・キュレーター

本セッションでは、アジア美術を扱う博物館とその美術品がどのようにその土地や外国からの鑑賞者との結びつきを深めるか、また世界中の博物館が連動することにより、どのようなメリットを享受できるかを検討するとともに、近年世界中の博物館でアジア美術への理解を深めようとする動きについて具体的な事例を踏まえた考察を行った。

ICFA 委員長でもある Christoph Lind 氏は、京都大会における ICFA のテーマは「美術館における異文化：西洋とアジア」であり、東西の融合の観点から間違ったカテゴリーを見直すことの必要性を述べた。日本美術の海外展を多く手掛けている河合正朝氏は、日本美術の展示・鑑賞に伝統的手法を取り入れることの意義について述べ、オーストラリアの博物館で学芸員を務める Min-Jung KIM 氏は、「アジア美術作品は、ハイブリッドなコレクションとして存在している」とし、植民地時代のネガティブな考え方を押し付けるのではなく、ミュージアムのコレクションにおけるハイブリッドの文化的なオブジェを見ることが重要だと指摘した。日本美術史が専門の Anne Nishimura Morse 氏は、米国内で日本美術専門家の高齢化が進んでいることを指摘した上で、CULCON（日米文化教育交流会議）美術対話委員会や JAWS（日本美術史に関する国際大学院生会議）プログラム等の取組を紹介し、日本美術専門家の国際的ネットワークを構築する必要性を強調した。モデレーターの Yukio Lippit 氏は、アジア美術コレクションは今や世界中で流動しており、歴史と文化の交わりによって生まれた数々の作品はハイブリッドなコレクションであるとの観点を持って、アジア美術をグローバルに評価することの重要性を述べて総括した。

3 パネル・ディスカッション

(1) デコロナイゼーションと返還

モデレーター：Afsin ALTAYLI ICOM 事務局 博物館・社会コーディネーター

Tonya NELSON ICOM 英国委員長

スピーカー：Marilia BONAS サンパウロ・レジスタンス記念館館長 ICOM ブラジル役員

Alec COLES 西オーストラリア博物館 CEO ICOM オーストラリア元委員長

Reena DEWAN コルカタ・クリエイティビティ・センター副所長

William U. EILAND ジョージア美術館館長 ICOM 英国役員

Laura PYE リバプール国立博物館館長 ICOM 英国会員

Michèle RIVET カナダ人権博物館副館長 ICOM カナダ役員

文化・教育機関の脱植民地化を責務として捉える傾向が高まる中、博物館所蔵品の返還が新たな注目を集めている。博物館の脱植民地化は、博物館による所蔵品の管理・解釈・展示方法に、明らかに大きな影響を及ぼすこととなる。また、こうした議論には、「植民地政策やその結果として収集された物品の正当な所有者は誰なのか」、「これらの所蔵品に意味を与える記述は誰が支配するのか」、「博物館としての考え方を定め、意見を決めることができるのは誰か」など、所有権・支配権・権力に関する問題が根本的に関わる。

本セッションでは、博物館による脱植民地化運動の先導・対応状況の検証のほか、返還に関する議論に脱植民地化がどう影響を及ぼしているかについて、これらの問題に対する様々な新しい視点や考え方の把握、および独創性を活かした新たな問題や紛争の解決に役立つ新たな手法の提案を通して検討を行った。

(2) 博物館と地域発展

モデレーター：Dorota FOLGA-JANUSZEWSKA ヤン 3 世宮殿博物館（ワルシャワ）副館長

Joana Sousa MONTEIRO リスボン博物館館長 ICOM CAMOC 委員長

スピーカー：門川 大作 京都市長

Lamia KAMAL-CHAOUI OECD 起業・中小企業・地域と都市センター局長

Peter KELLER ICOM 事務局長

Luis Orlando REPETTO MÁLAGA 教皇庁立カトリック大学リバ・アグエロ研究所美術・

大衆伝統博物館館長 ICOM ペルー副委員長

ICOM は過去 10 年間にわたり、博物館がより良い社会を創出するために果たせる役割を、高レベルの政府間組織との連携を強化することによって、積極的にアピールしてきた。

たとえば経済協力開発機構（OECD）との協力は、『地方政府、コミュニティ、ミュージアム向けのガイド（Guide for Local Governments, Communities and Museums）』の出版につながった。本ガイドには、ICOM が草案を作成したユネスコ「ミュージアムとコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告」（2015 年採択）に基づき、博物館が地方政府による決定や政策立案の優先事項であり続けるための、地方政府との具体的な連携方法が示されている。

また、本ガイドは 2018 年 8 月の ICOM 持続可能性ワーキンググループの創設に伴い策定された持続可能

な開発に関する ICOM の戦略を反映しており、キャパシティ・ビルディングや活動支援のツールとしても使用できる。

ICOM と OECD による本共同セッションでは、博物館、地方政府、地方政府からなる国際ネットワークの代表者が結集し、博物館・地域社会・地方政府との相互関係を様々な側面から議論し、各地域において持続可能な開発戦略をより効果的に実施するために、より強固な政策・行動計画の策定に向けた今後の戦略について意見を出し合った。

(3) マンガ展の可能性と不可能性

モデレーター：伊藤 遊 京都精華大学国際マンガ研究センター／京都国際マンガミュージアム

スピーカー：南 鉦勳（ナム・ジョンフン）釜山ウェブトゥーンフェスティバル

Nicole Coolidge ROUSMANIERE 大英博物館／イースト・アングリア大学

ユー スギョン 京都精華大学国際マンガ研究センター／京都国際マンガミュージアム

吉村 和真 京都精華大学

まず、ルーマニエール氏から、同氏がキュレーションした大英博物館のマンガ展「The Citi exhibition: Manga」（2019 年 5 月 23 日～8 月 26 日）に関して、企画を通し、現実の展示に落とし込むにあたっての苦労や工夫等が説明された。また、この「実験的なチャンス」に対する来場者の反応や、大英博物館内部の反応の変化についても語られた。

次に、ナム氏が、同氏のキュレーションしている、「釜山グローバルウェブトゥーンセンター」における過去 4 回分の企画展に関して、写真や動画を見せながら、具体的な工夫等を説明した。

続いて、ユー氏は、同氏の勤める京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センターが、マンガ資料アーカイブの一環として実施している、マンガ原画の複製制作プロジェクト「原画」（ダッシュ）について説明した。また、アーカイブ事業では常に、資料の「活用」ということが意識されていて、原画ダッシュプロジェクトにおいては、その一つが展覧会であるとした。

その後、吉村氏とイトウが加わり、登壇者全員で、そもそもマンガの原画の価値とは何なのか、といったことが議論された。ルーマニエール氏は、大英博物館でのマンガ展において、マンガ原画は最も重要な要素であるとし、それが、「人間の手による」創造物であるからだと述べた。

一方、そもそも、マンガ作品がデジタルデータとして作られることの多い「ウェブトゥーン」を扱っているナム氏は、マンガ原画が重要だと思われる理由を、それが、読者が最終的に目にする形になる前の、創作プロセスの一部であるからと解釈する。創作プロセス自体は、アナログであろうとデジタルであろうと存在するので、「ウェブトゥーンセンター」における（デジタルデータである）ウェブトゥーン作品の展示においては、創作プロセスが垣間見られるような展示をしていると述べた。

今、みんなで
作り上げよう！

ICOM京都大会からみた あたらしい ミュージアム のかたちとは？

ICOM京都大会2019報告会兼ワークショップ

2019年9月に開催されたICOM京都大会では、博物館はどうすれば社会に貢献できるのか、博物館はよりよい未来のために何ができるのか、世界の博物館職員や関係者が集まって議論をしました。テーマは、持続可能性や防災・減災、あるいは博物館の新しい定義など多岐にわたり、白熱した議論が交わされました。

しかし残念ながら、全てのセッションに参加できた人は少ないのではないのでしょうか。また、もう一度議論の要点をおさらいしたいという方もいらっしゃると思います。

そこで、私達はICOM京都大会2019の振り返りをおこない、ICOMの成果を今後日本のミュージアムにどのように還元できるのかを具体的に検討するワークショップを企画しました。ICOMに参加しなかった/できなかった学芸員たち/実務者たちにとっても、ICOMの成果が日々のリアルな業務にどう役立つのか、具体的に見出す機会となれば幸いです。

ICOMで提示された様々な「素材」をどう「調理」したら、真に我々の「糧」となるか、このワークショップ参加者の皆様と共に考えたいと思います。

1/13 2020 [月・祝]
10:30-16:30
[開場 10:00]

参加費
無料

事前
申込制

1部 ICOM京都大会レポート

◆どなたでもご参加いただけます

10:30-12:00 [定員160名]

ICOM京都大会の報告会。
各セッションの要点を共有します。

当日の流れは裏面をご覧ください

2部 ワークショップ「ミュージアムの新たな形」

◆対象者 博物館職員・博物館研究者（ICOM会員有資格者）

13:30-16:30 [定員50名程度]

ICOM京都大会の報告を踏まえて、今後、日本のミュージアムはどのように変わっていきけるか、自分の仕事の中で具体的にどのようなことができるのか、それぞれの立場から議論します。

ファシリテーター
高尾戸美(多摩六都科学館)
佐藤優香(東京大学大学院情報学環)

京都文化博物館
TEL 075-222-0888 FAX 075-222-0889
URL <http://www.kyomusei.jp/>

ICOM
KYOTO 2019

主催：京都歴史文化施設クラスター実行委員会、ICOM京都大会2019組織委員会、ICOM日本委員会

(2) 広報用チラシ表面

1部 ICOM京都大会レポート

10:00-10:30 受付 於：京都文化博物館3階フィルムシアター入口

10:30-10:35 挨拶、趣旨説明

10:35-10:45 京都大会2019概要の紹介

10:45-11:25 専門家によるポイント解説

- ・基調講演
- ・プレナリー・セッション(全体会議)
「持続可能な未来の共創」
「ICOM博物館定義の再考」
「被災時の博物館」
「世界のアジア美術とミュージアム」
- ・パネルディスカッション
「デコロナイゼーションと返還」
「博物館と地域発展」
「マンガ展の可能性と不可能性」

11:25-11:55 質疑応答

基調講演、全体会議、パネルディスカッション
の要点をそれぞれ5分で解説します

2部 ワークショップ 「ミュージアムの新たな形」

13:30-13:35 ガイダンス

13:35-13:50 問いかけ

13:50-15:25 グループワーク

15:25-15:35 休憩

15:35-16:25 グループ発表

16:25-16:30 全体まとめとこれから

一緒に考えて
みませんか？

日々の業務に
どう役立つのか？

博物館
定義

防災

アジア
美術

etc

日本のミュージアムは
どう変わっていきけるか？

会場

第1部：京都文化博物館3階フィルムシアター

第2部：京都文化博物館6階和室

京都市中京区三条高倉

Tel 075-222-0888 Fax 075-222-0889

◎和室は畳敷きのため、服装等にご配慮ください。

申し込み方法

下記URLまたはQRコードより
受付フォームにアクセスして
いただき参加者1名ごとにお
申し込みください。
先着順となります。

<https://bit.ly/37OSMXA>

◎詳細はICOM京都大会のホームページから
<https://icom-kyoto-2019.org/jp>



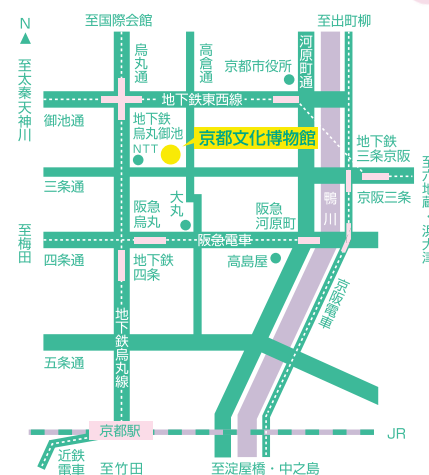
ICOM(国際博物館会議)京都大会2019
記念シンポジウム

日本のミュージアムの未来

2020年2月11日(火・祝) 京都国立博物館

2020年2月23日(日) 東京国立博物館

お問い合わせ
ICOM京都大会準備室 office@icomkyoto2019.kyoto



- 地下鉄「烏丸御池駅」下車、5番出口から三条通を東へ徒歩約3分
- 阪急「烏丸駅」下車、16番出口から高倉通を北へ徒歩約7分
- 京阪「三条駅」下車、6番出口から三条通を西へ徒歩約15分
- JR・近鉄「京都駅」から地下鉄へ
- 市バス「堺町御池」下車、徒歩約2分

京都歴史文化施設クラスター実行委員会の構成団体
京都文化博物館、姉小路界限を考える会、公益財団法人
京都古文化保存協会、京都市学校歴史博物館、京都市考
古資料館、京都市歴史資料館、京の三条まちづくり協議
会、京都府、一般社団法人千總文化研究所

(2) 広報用チラシ裏面



(3) ワークショップ参加者の集合写真

編集 京都文化博物館・ICOM 京都大会準備室
発行 京都歴史文化施設クラスター実行委員会
発行日 2020 年 3 月 10 日